

琉球大学学術リポジトリ

神宮文庫本『狭衣』翻刻(巻一)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩野, 敦子, Hagino, Atsuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/908

神宮文庫本『狭衣』翻刻（巻一）

萩野敦子

はじめに

『狭衣物語』の一伝本たる神宮文庫本は、中世末期から近世初期にかけての書写とみられる四巻四冊の完本である。その本文は諸伝本の要素を取り入れた混雑的性格が著しいが、それゆえ『狭衣物語』の流布・享受の一樣相を知るうえでの貴重な資料といえる。本稿をその翻刻紹介の第一回とし、引き続き本紀要に連載する（全五回）予定である。なお、貴重な写本の翻刻公開をお許しくださった神宮文庫関係者の方々に、記して感謝申し上げる。

凡 例

一、本稿は、神宮文庫蔵『狭衣』全四冊（いわゆる『狭衣物語』全四巻）のうち、巻一（原本では一冊目。表紙には『狭衣 上』とある）を翻刻したものである。

二、紙幅の關係で原本どおりの行取りにはせず、追い込みで翻字した。和歌に関しては、原本の体裁と同様二字下げとし、後続の散文は行替えせずに続けた。ただし和歌が二首続く場合には、原本と同様に二首とも二字下げで前後の行から独立させて示した。

三、原本で本文の開始となる丁を第1丁とし、各丁表・裏（略称オ・ウ）の区切りごとに、（1オ）以下の印をつけた。ここまですが第1丁表に相当するという意味である。

四、翻刻にあたっては、現行の正字体を用いた。また、原本に存在する各種の書き込みを再現するにあたり、便宜上次のような記号を用い

た。

① 見せ消ち部分には傍線を引き、訂正本文がある場合には（ ）を付して記す。

② 補入文字については□で囲む。

③ 異文注記については、注記の対象となる本文のあとに《 》を付して記す。

五、明らかな誤字誤写とみられる場合でも特に「ママ」等の注記をほどこさず、原本に忠実に翻刻することを旨とした。

神宮文庫本『狭衣』（巻一）

狭衣 上（表紙）

白紙（見返し）

少ねんの春はおしめともとまらぬものなりければやよひの廿日あまりにもなりぬ御まへの木たちなにとなくあをみわたりてこくらきなかに申しまのふちはまつにとのみもおもはすきかゝりて山ほとゝきすましかほなるにいけのみきはのやへ山吹はあてのわたりにことならすみわたさるゝをひかるけんしの身もなけつへきとの給けんもかくやなとひとりみたまふもあかねはさふらいわらはのをかしけなるして一えたおらせ給てけんしの宮の御かたにもてまいりたまへり御まへには中なこん中将やうの人々さふらひてみやは御てならひゑなとかきすさひてそふさせ（1オ）給へるにこの花のゆふはへこそつねよりもをかしうみえ侍れ春宮のさか

りにはかならずみせよとの給はするものをいかで御らんせさせてしかな
とてうちをき給ふを宮すこしおきあかりてみをこせたまへる御つらつき
まみのうつくしきは花のほひふちのしなひにもこよなくまさりてみえ
給をれいのむねうちきはきてつくく」とまほらせ給に花こそ春のととり
わきて山吹をてまさくりにしたまへる御てつきいとゝもてはやされてい
ひしらすうつくしけなるを人めもしらす我身にひきそへまほしくおほゆ
るさまそいみしきやくちなしにしもさきそめけんちき(1ウ)「りそく
ちおしき心のうちいかにくるしかるらんとたまへは中なこんの君さる
はこのははおほく侍るものをといふ

いかにせむいはぬ色なる花なれば心のうちをしる人そなきとおもひ
つゝけられ給へとけに人もしらさりけりたつをたまきのとうちなけかれ
てもやのはしらにより給へる御かたちそ猶たくひなく見え給によしな
きことによりさはかりの御身をむろのやしまのとのみおもひこかれ給そ
いと心くるしきやさるはこのけふりのたゝすまひしらせてまつらんこ
ともをよひなくいかならんたよりにてなとおほしわつらふには(2オ)「
あらずたゝふたはより露はかりのへたてなくおひたち給ておやたちをは
しめよその人々みかと春宮なともひとついてもせとおほしめしをきてたる
をわれはわれとかゝる心のつきそめておもひわひつのめかしてもかひな
かるへきものからあはれに思ひかはし給へるにおもはずなる心^のあり
けるよとおほしうとまれこそせめ大殿宮なともたくひなき御心さしとい
ひなからこの御ことはさらはさてもあれかしとはよにまかせ給はしよそ
の人のきゝおもはむもゆかしけなくけしからすもあるへきかなゝととさ
まかうさまに世のときになりぬへきことなれはあるましきことゝふか
く(2ウ)「おほしとるにもあやにくに心のうちはくたけまさりつゝけ
にいかなるさまにかつゐには身をもなしはてんと心ほそくおほさるへし
いまはしめたることにはあらねともなを世中にさらても有ぬへかりける

ことはあまりよろづすくれ給へらん女の御あたりにはまことの御せうと
ならざらんおとこはいみしうともむつまじうはおほしたて給ふましきわ
さなりけれとはやうはなかつみのしゝうさい中將なとやうのためしともゝ
なくやはましてこれはことほりそかしいはけなくより人にもにすめてた
き御ありさまをやうくものゝ心しり給まゝにかゝらん人をこそわかも
のにはせめこれに(3オ)「をとりたらん人をはみしとのみおほしし
にけれはとかく人を見あつめ給まゝにいとかくしもつくりをきゝこえけ
んむすふの神さへうらめしくそおほさるゝこのころほりかわのおとゝと
きこえさせてくわんはくしたまふは一条院たうたいなとの御ひとつきさ
いはらの二のみこそかしはゝきさきも打つゝきみかとの御すちにていつ
かたにつけてもをしなへておなしみこときこえさするにもいとかたしけ
なき御身のほとなれとなにのつみにかたゝ人になり給にけれと故院の御
ゆいこんのまゝにうちかはりみかたとゝこの御心によをまかせきこえ給
て御なかなともあらまほし(3ウ)「うめてたき御有さまともなり二て
うほりかわのわたりを四まちつきこめて三かたにへたてつゝつくりみかゝ
せ給へるたまのうてなに北のかた三人をそすませたてまつり給ひけるほ
りかは二ちやうにはやかて御ゆかりはなれぬこせんたいの御いもうと前
齋宮おはしますとゝうゐんにはたゝいまのおほき大とのときこえさする御
むすめ一条院のきさいの宮の御をとうと春宮の御をはよ世のおほえうち
くの御ありさまはなやかたのもしけなりはうもんにはしきふきやう
の宮ときこえさせし御むすめそなかには心ほそける御ありさまなるへ
けれと女君のよにしらすめてた(4オ)「き一とこゝろうみたてまつり給
へりけるをうちにまいらせたてまつり給てこのころ中宮ときこえさす今
上の一のみこさへいておはしましたる御いきほひなかゝすくれてめて
たく行すゑまてたのもしき御有さまをついちをへたてつゝかよひて殿は
みたてまつり給かゝる御なかにも齋宮はおやさまにあつかり給てしかは

やんことなくかたしけなきかたも御かたちありさまをはしめて心さまも
 なへてならすおもひきこえさせ給へる御かたにしもかくすくれてこの世
 のものとも見え給はぬおとこ君さへたゝ一人ものし給をいかてか世のつ
 ねにおもひ（4ウ）「きこえさせ給はんあまたものしたまはんにてたに
 いとかゝらんはおやの御心ちにもいかてかすくれておほしかしつかさ
 らんと見えたりこのころ御とし廿にいま二はかりやたり給はさらん二ぬ中
 将とそきこゆるなへての人たにかはりにては中なこんにもなり給へき
 そかしされともこの御有さまのよろつこの世の物ともみえたまはぬゆゑ
 しさにおほしおちて御心にもまかせきこえ給はぬなるへしこれをたには
 宮はちこのやうなるものとあへかにいまくしきまておほしためれと
 をしなへての殿上人のやうま（に）てましらひ給はんか心くるしさにう
 ちのうへ（5オ）のせちになさせ給へるなるへしたい十六かさかむに
 仏とりこの世のひかりのためとけにあやうきものにおもひきこえさせ給
 へるもことはりなりやたゝうちみるよその人たに我身のうへをもわすれ
 思ふことなき心ちすれはまいて大殿などはあめかせのあらきにも月日の
 ひかりのさやかなるにあたり給ふもいまくしき物におもひき
 こえたまひつゝおほふばかりの袖のいとまなくあまりこちたき御もてな
 しともをうきはたのまれぬへくるしくおほさるゝおりもあるへしされ
 とさのみもいかてかはしたかひきこえ給はんよるなとをのつからまされ
 給（5ウ）「夜なくはふた所なからうちもまともすうしろめたきこ
 とをなけきあかせ給へとむかひきこえさせたまひぬれは思ふまゝにも
 せいしの給はてたゝうちあみつゝみたてまつり給へるけしきともいひし
 らすあはれけなり見くるしくあるましきことをし給ともこの御こゝ
 ろにすこしにてもくるしうおほしぬへからんことをはたかへきこえさせ
 給へうもあらずゆめばかりもあはれをかけ給はん人をはいひしらぬしつ
 のめなりともたまのうてなにはくくまんことをおほしをきつれといかな

ることにか御身のほとよりいみしくしつまりてこの世はかりそめにあ
 ち（6オ）「きなき物とおほしてありてふ人はしらまほしく（け）にも
 おほしたらすおほろけならす」さらんことは御めもみゝもとゝめ給へうも
 あらねはすこしものすきましう心もやましき御けしきなるをくちおしく
 心もとなき物におもひきこゆる人々もあるへしさるはまれくゝひとくた
 りもかきなかし給みつくきのあとも猶めつらしくをきかたき物に思ひか
 ことはかりのゆくてのなさけをも身にしみてをかしういみしとこゝろを
 つくしまいてちかきほと御けはひなとはちよを一夜になさまほしくと
 りの音つゝきあかつきのわかれにきえかへりいりぬるい（6ウ）「その
 なかくなるなけきをひるよなく心をつくす人々たかきもいやしきもを
 のつからいかてかなからんそれにつけてはいとゝうらみ所なくすきまし
 さのみまさり給へかめれといとなへてならぬあたりにはなたらかになさ
 けを見せ給ひておりにあひたる花もみちしも雪雨かせのあらきまきれも
 しはあはれまさりぬへき夕くれあかつきのしきのはかせにつけておもひ
 かけぬほとにさすかにいつくにもをとつれ給ことはたえすかけろふにを
 とらぬおりくにつけては中く心をまとはしていなふちのたきまさり
 ていそふりに心をつくし給なめりかしきこそまめ（7オ）「たち給へと
 猶このあくせにむまれ給へはにやたゝひきすぎ給みちのたよりにもすこ
 しゆへつきたる山かつのかきほのなてしこはをのつからめとまらぬにし
 もあらぬほとにのをなつかしみたひねし給あたりもあるにやいかなるお
 りにかほんわう経に一けんを女人との給へることをおほしいつれはくる
 まのすたれうちをろしつれとそはのひろくあきたるをはえたてたまはぬ
 なめりかしさてたにいかてかおはせさらんおとこといふものはあやしき
 たにもみのほともしらすいかなるものゆかしかりせぬものはなき世のさ
 かなりければまひてひかりかゝやき給御かたちをはさ（7ウ）「るもの
 にて御心はへまことにしき御さえなともろこしにやたくひもあらんこ

の世にはいまでもむかしもためしなくそのし給ひけるてなとかき給さま
 もいにしへのなたかかりける人々のあとは千とせふれともかはらぬに見
 あはせ給へはなをときにしたかふわさにやいまめかしくたをやかになつ
 かしくうつくしきさまはこよなくかきまし給へりとそさためられ給める
 又ことふえの音につけても雲井の(を)ひゝかしこの世のほかまですみ
 のほりてあめつちをうこかし給つへきをいとあまりゆゝしくおほしてお
 やたちせいしきこえ給てなにことをもあ(8才)「なかにこのみせさ
 せたてまつり給はねはわれも心とゝめて人にみゝならし給はすなとあれ
 はよろつにむしむにものすさまじき人さまにやとをしはかられたまへと
 すこしさいはらうたひ経なとよみ給へるはきかまほしくめてたし何事も
 たてゝならひ給こともなしこの御師となるへき人もなければとゝいかに
 したまへるにかめつらしくためしなき御さまけしきなどは打みてまつ
 るより御かたち身のさえなとも御としのほとにもすきてまひてさかりに
 ねひとゝのひ給はんゆくすゑゆかしくあまりなるわさかなとおとろきあ
 さみこ(8ウ)「のよのひかりのためにあみた仏のかりそめにいて給へ
 るにやといひしらぬしつのおなともみたまつりてはわか身のうれへも
 わすれてあさましけなるかほのゆくゑもしらすゑみひろこりあるはをか
 みたてまつりてなみたをなかしよの人のことくさにきこえさすめれと
 大とのなとはあまりゆゝしくあめわかみこのあまくたり給へるにやとけ
 ふやあまのはころもむかへにえたまはんとあやうくしつ心なき御心のう
 ちともなりけんしの宮ときこゆるはこせんたいの御すゑの世に中なこん
 の宮す所ときこえ給し御はらにたくひなくうつくしき(9才)「女宮の
 むまれ給へりしをいまさらのほたしと心くるしくおほしはくゝみしほと
 に宮の三つに成給ひしに院もはゝ宮す所もうちつゝきかくれさせ給ひし
 かはいとこゝろくるしうて斎宮やかてむかへとりきこえ給て中将のおな
 しことにおもひかしつききこえさせ給とのもまことの御むすめよりもい

ますこしやんことなきかたそへておもひかしつききこえ給へり十に四五
 あまらせ給へる御かたち有さまほのみたてまつらん人はいかなるものゝ
 ふなりともやはらく心かならずつきぬへきに中将の御心のうちはことは
 りそかししはしはさりとともなすらへ(9ウ)「なる人もありなんとたの
 まれ給しをかのよししたかくれみのをこそえ給はねとをのつからたかき
 もくたれるもたつねよりつゝいたゝのはしはくつれといとけちかきほと
 にこそあらねたちきゝかひまみなどはかしこく御心にいりたるまゝにお
 ほつかなきはすくなくれとこの御かたちありさまになすらふはかりのあ
 りかたきわさにこそとおほさるゝまゝにいとゝ人しれぬ心のうちにおも
 ひこかれ給さまいとをしくをとなしのたきとやつるになりはてんと見ゆ
 るをさすかに忍びまきはし給にはれゝしからすむすほゝれ給へる御
 けしきををとなひ(10才)「給ふまゝに人の御くせにこそと忍ぶもちす
 りをたれもえしり給はぬなるへしおほき大とのゝ御かたにそかやうの人
 いておはせといとつれゝにおほさるゝまゝにさるへからん人のむすめ
 かなあつかりてあつかひくさにせむなとあけくれはうらやみ給ひけり源
 氏の宮の御かたちなたかくて春宮いとゆかしうおもひきこえ給へるをけ
 にこそはつるのことならめとおほしたり内のうへもむかしの御ゆいこん
 をおほしわすれすあはれにきこえさせ給ひなからもおほつかなくてすこ
 させ給ふにさやうにて内すみもし給へかしとをゝにもきこえさせおと
 ろかさせ給(10ウ)「へりされといとゝしき御有さまをいますこしねひ
 とゝのほり給ひてこそなとおほろけならすおほしをきつる御いそぎなる
 へしかくいふほとにう月もすきてさ月の四日にもなりにけり夕つかた中
 将の君うちよりまかて給みちすから見給へはあやめひきさけぬしつのを
 なくゆきちかひもてあつかふさまにもけにいかはかりふかゝりけるとを
 ちのさとの恋路なるらんとみゆるあしもとゝものいみしけなるをいかに
 くるしかるらんとめとまり給て

うきしつみねのみなかるゝあやめくさかゝる恋路と人はしらぬにと
 そいはれ給たまの（11才）うてなのは軒はにかけて見給はをかしうのみ
 こそおほさるゝを御くるまのさきなるをおとろくしき御すいしんのこ
 ゑくにおひとゝめられて身のならんやうもしらすかゝまりぬるを御ら
 んしてさはかりくるしけなるものをかくないひそとせひせさせ給へはな
 らひにて待ればさはかりの物はなにしかくるしとおもひらんと申を恋
 のもちふはわか御身にならひたまへればこゝろうくもいふかなときゝ給
 おほきなるもちいさきもつまことにふきさくを御くるまよりすこしの
 そきつゝすぎ給にいひしらすあやしきいほりともにたゝひとすちつゝを
 きわたすをなに（11才）の人まねすらんとあはれに見給ふあふきをふ
 えにふきつゝほの見え給へるゆふはへの御かたちまことにひかるやうな
 るをはしとみにあつまりたちてみたてまつるあくる人々有けり御くるま
 などもいまはをとなしくなり給めれと御とのさうしき御すいしんなど
 はいとわかくをかしけにをもゝちけしきすかたなともなへての人と見え
 すめつらしくうつくしけなるをあはれあれか身にてたにあらはやなにこ
 とをおもふらんとわかき人々はめて給ひてすぎ給もなをあかねは軒のあ
 やめ一すちをひきおとしていそきかきてはしたものをかし（12才）
 けなるしてをひてたてまつるをくれてはしる御すい身にとらせてかへる
 をいつくよりとか申さんやかて御くるまにまいり給へとてとらへつ御ら
 んすれば

しらぬまのあやめはそれと見えすともよもきかかとはすぎすもあら
 なんとそあるいかなるすぎ物ならんとほゝゑまれ給てつかひにとはせた
 まへといはんやは心とき御すい身そのわたりにてふてもとめてまいらせ
 たるしてふところかみにかたかなにて

見もわかつてすきにけるかなをしなへて軒のあやめのひましなければ
 いまわざとまいらせん（12才）といはせ給てわらはのいらん所たしか

に見せよとの給へははしとみたかくあけわたして人々のすきかけあまた
 見え侍つと申せはなに人なるらん見しりつるやとおほせとかやうに（の）
 うちつけけそうなどはわざと御心にもいらてたゝあるましきことをそい
 かなるも御心とゝめ給へかめる又の日はさるへき所々に御ふみかき給色々
 のかみの色はたへなとえならぬあまたとりちらしてすみこまやかにをし
 すりてかき給ふ御てはけになてかはずこしも物みしらん人のいたつら
 に見すくさんで見ゆるに御うたともそさしもことになへての人のくちつ
 きにてた（13才）にをかしとも見えぬはまねひたかへたるなめりさ大
 將の御むすめせんえう殿ときこえて春宮いみしうときめかし給をいかな
 りけるかせのたよりにかほのかに見きこえさせ給てけりされといかてか
 おもふさまにもあらん御せうそこたにおほろけならてはかよふことかた
 くそありけるあまりにまちとをなりけるも恋しくおもひいてられ給て

恋わたる袂はいろもかはらぬにけふはあやめのねさへなかれて一条
 院の姫宮の御けはひもほのかなりしかはにやなへてならぬ心せしをい
 かて御かたちなどよくみ^たてまつらんと心に（13才）かゝり給へは少
 將の命婦のもとへれいのこまやかにて中には

思ひつゝいはかきぬまのあやめ草みこもりならくちやはてなんな
 とやうにてあまたあれとおなしすちなればとゝめつかやうにおりにつけ
 たることのはなとはちらし給へと心のうちにはいつまてかとのみこの世
 はかりそめにものすさまじくそおほさるへき丁子にくろむまでそゝきた
 る御ひとへにくれなぬのはかまき給ていけのしやうふの心ちよけにしけ
 りたるをなかもやり給て一しよにさんす《すんにみてるイ》とすむし給
 御こゑはなをたくひなしありつる御かへりいづれ（14才）もをかしけ
 なるにもせんえうてんのは御ても心ことにをかしけにて

うきにのみしつむみ草となりはてゝけふはあやめのねたになかれす
 とあるけしきなどもむかひきこえたる心ちしてらうたけにあはれあさか

らねはすこしなみたくまれたまひぬその夜はもしさりぬへきひまもやと
うちわたりにいてたち給にいとゝめしさへあれはまいり給にまつとのゝ
御かたへまいり給へりけふはいまたみたてまつりたまはさりつるにめつ
らしきにほひそひ給へる心ちしてうちあみつゝつくゝとまもられ給内
よりめしあれはまいり(14ウ)「待みやの御かたへ御せうそこやと申給
へはけされるならぬさまにきゝまいらせつればまいらんとしつるをかせ
にや心ちもなやましくてくらし侍りつるをいまつとめての程にためらひ
てまいらんあつき程はしはしいてゝやすませ給へ」とかしとおもふもれい
の御いとまや有かたからんときこえさせ給へは御いらへしてたち給ぬま
たしきにあつきところせきとしかななにしにつねにめすらんとつふやき
給をはゝ宮きゝ給てくるしうおほえ給はゝなにかはまいり給うちわなと
せさせてふし給へかしとて心くるしけに見やりきこえさせ給ふさうかん
(15才)「のくれなゐの御ひとへにおなし御なをしのいとこきになまめかし
しこのふせんれうの御さしぬきのすそまでたをゝとあてになまめかし
うきなし給へるものゝ色あひなとなへての人のきるおなし物とも見えぬ
をなとかくあまりゆゝしくおいなり給らんとなみたをひとめうけてせち
に見をくらせたまへるを御まへなる人々ことほりなりかしとあはれに見
たてまつる人々ことうちにはわさとせちゑなともなき世のつれゝにお
ほしめさるゝにあま雲さへたちわたりて物むつかしきなくさめに春宮わ
たらせ給て御物かたりなとあるなりけり御前のひ(15ウ)「ろひさしに
大とのゝこん中なこん左兵衛督右大将の御子のさいしやうなとやうのわ
かゝむたちめあまたさふらひ給に源中将のまいり給はぬをいとゝしき五
月雨の空ひかりなき心せさせ給てめすなりけりこよひのえんにはさふ
らふかきりの人々はさえのかきりてをおしますひとりつゝ心みんとした
まはするを春宮もけうあることゝのたまはせてさまゝの御ことゝもた
てまつりわたす中なこんひは兵衛督しやうのことさいしやうの中將わこ

ん中務宮のせうしやうしやうのふゑ源中将よこふえたまはすたゝいまの
いみしき物の上手ともなるへしをのゝこの音ともてをつくし(16才)「
てきかせよとの給はするをたれもひとつにかきませてこそあやしきもま
きはしてつかうまつらめいとはりなきわさかなとつかうまつりにくゝ
わひ給ふ中に中将はよろづのことよりもまたたはふれにも更にまねひ侍
らぬものをとそうし給をたゝそのしらさむことをこよひはしむへきな
りと給はすれとをしふる人たに侍らはたとゝもつかうまつるへき
にをのをのてをつくし給はんなかにたとゝくしはしめ侍らんはけにか
きりなきよのためしにや侍らんとてことのほかにて手もふれたまはねは
いとかはかりの心はへとは思はすこそ有つれ(16ウ)「ことのほかにこ
そとしころおとゝの思ひたりつるにもをとらすこそ思ふにかはかりの
ことをたにいふまゝならさりければましてよろづをしはかられぬよし
くいはしとまめたち給にいとわひしくてかしこまりてとりよせ給ても
物にませてはをのつかからかたのやうにもまねひ候なんひとりはいとわり
なきわさなれとなやめるけしきのをかしさにうらみはてさせ給へくもあ
らす御らんしける人々もなかゝことなる御あそびと心つくろひしてと
みにてもふれ給はす中将の四五のさえはかりにたに侍らぬものゝて(17
才)「をまきれなくひきあらはし候なんはつかしきによろづの人のかは
りにことをかへつゝつかうまつらせはやとこんちうなこんそうし給へは
ひとつをたにさはかりこゝろこはからんにまして人のかはりすへうもあ
らさめりとてせめさせ給へはをのゝこゝろつよひいたうしてひきいて
給へるものゝ音ともいとおもしろし中将のふえに成てさていかにつかふ
まつるまじきかなとたひくゝまめやかなる御けしきにてせめさせ給へは
いとわひしくてかくとしら^ませはまいらさらましをとくやしけれとの
かるへうもあら(17ウ)「すふえをもうゑくしけにとりなしてことに
人のきゝしらぬてうしひとつはかりふきならし給へるにうへはをとにきゝ

つれといとかくまでとはおほしめさゝりつるをいままでみゝならさゝりつるうらめしさをさへひきそへておほせられてめておとろかせ給さまいとこちたしきくかきりの人々さらにこの世のものゝ音とはきこえぬにのみたもとゝめかたけれと中々なる程にやめ給ぬるをいとあるましきことゝせめの給はすれとたゝかはかりなをと^上のたはふれにをしへ侍りしこれよりほかにすへておほえ侍ら（18才）すとそうし給へはいとゝうたてくそらことをさへつきくしういふかなおとゝのふえの音になるへくもあらずすへてかくくしとおもはれんことさらにいはいしこよひは猶うらみとくはかりとあなかななる御けしきのかたしけなきもいとわひしくて皇太后宮のひめ宮などのうへの御つほねにおはしますころにて心にくき御あたりはなに事ものこりなくはきかれたてまつらしと思ふかたさへいとゝしきなるへし月はとくいりて御せんとうろの火ともひるのやうなるにほかけにかたちはいとひかるやうにてはしらによりゐてま（18ウ）めやかにわふくゝふきいて給へるふえの音雲井をひゝかし給へるにみかとをはしめたてまつりてこゝのへのうちのしつのをまでききおとろきてなみたをおとさぬはなし五月雨の空物むつかしけなるに物やめみいりきこゆらんとまでゆゝしくあはれにたれも御らんするにおとゝましてみたまはゝいかばかりいまゝしくおほさんわか御心ちにもおとろかせ給御そもしほるはかりにならせ給ぬよひするまゝに雲のはたてひゝきのほる心ちするにいなつまたひゝくして雲のたゝすまるれいならぬを神のなるへきにやとみゆるに（19才）ほとなく空いたくはれてほしの光とも月にことならずかゝやきわたりつゝこの御ふえのおなしこゑにさまゝのものの音とも空にきこえてかくの音いとおもしろく御かと春宮をはしめ奉りていかなることとあさみさはかせ給に中将君ゆゝしくあはれに物心ほそくおほされておさゝくをしむてもなくふきすまし給へるをあまりなるまであさましきにたれもゝあきれたるやうなりかく

のこゑくちかくなりてむらさきの雲にのりてあそふもいとちかく見ゆるをみさはきたるに中将の君物心ほそくなりていたうおしみ給ふ音を（19ウ）やゝのこすくまなくふきすまして

いなつまの光にゆかんあまのはらはるかにわたせ雲のかけはしと音のかきりふきたまへるはけに雲のなかにひゝきいるに月の宮この人もいかてかおとろかさらんとおほゆるにかくのこゑくいとちかくなりてむらさきの雲たなひきたるをみるにひんつらゆひていひしらすをかしけるわらはのしやうそくうるはしくしたるふとおりくるまゝにいとゆふかなにそとおほゆるいとうすきころもを中将にうちきせ給て袖をひき給をわれもいみしう物こゝろほそくて立とまるへき心ちもせずかくめて（20才）たき御有さまのひきはなれかたてふえをふくゝさそはれぬへきけしきなるに御かと御こゝろさはかせ給て世の人のことくさにこの世の物にはあらず天人のあまくたれるならんとのみいひおもひたるはまことにごそ有けれおとゝのかやうのことをたまさかにせさせす月日のひかりにあてしとあやうくいまゝしきことにおもひたる物をめにみすくくものはたてにまよはしてはわか御身もこの世にすこさせ給ふへくもおほえさせ給はねはなみたもゑとゝめさせ給はすいといみしき御けしきてひきとゝめさせ給にましておとゝはゝ宮などの（20ウ）きゝ給はんことおほすにいとほしうおほさるゝこの世なれとふりすてかたきにやかゝる御むかへのかたしけなきにひとへに思ひたてと御かとの袖をひかへておしみかなしみ給おやたちのかつみるたにあかすうしろめたくおほしたるを行ゑなくきゝ給てむなしき空をかたみとなかめ給はんさまのかなしさよ（に）はこのたひの御とともにまいるましきよしをいひしらすかなしくおもしろくつくりてふえをもちなからすこしなみたきみ給へる御かほは天人にならひ給へるにもほひあひ行はこよなくまさりてめてたき御こゑしてすんし給へるにあめ（21才）わかみなみたをなかし給てか

くなに事もこの世にすぐれ有かたきによりさそひつれと十せんの君のおしみなし給ことほりにめてたうかなしきふみの心はへによりとゝめつるくちをしきをつくりかはして雲のこしよせてのり給ぬるなこりのにほひはかりとまりて空のけしきもかはりぬるをあさましなともおろかなることをこそいへめつらかなりと見るかきりは夢の心ちし給ひけり中將の君はあめわかみこの御ありさまをもかけにこひしくていみしう物あればと思ひたるさまにて空をつくくとなかめいり給へるけし(21ウ)きにて

こゝのへの雲のうへまでのほりなはあまつ空をやかたみとはみんないとゝこの世の(に)心とゝめすやなりなむとあやうくうしろめたくおほしめされて何事に心をすこしなくさめんとおほしまはすに大臣になすともうれしとおもはしおとゝもさらにうけひかしとかひなくおほしめすに皇太后宮の御はらの女二の宮の御かたち心はせことほりにもすきておはしますをいみしくかなしき物にしたてまつり給けり一の宮はこのころ齋院にておはしますききもこの宮をはたくひなく思ひかしつききえさせ(22才)給てよのつねの御有さまなとおほしかくへくもなきを中將のこよひのものゝ音に天人たにきゝすくしたまはてをはしてさそひ給へりにたゝにてやませ給はんことあるまじきことなるにそへてかく心くるしけに思ひあくかれぬへきけしきなるに宮このころさかりにとゝのひ給へるさま見たてまつらんにはこの世にはえあくかれしとおほしなりぬおほ殿には中將の君はこよひはいて給ましきにやとたつねさせ給ほとに藏人所のかたにこはたかに物いふをなに事ならんときかせ給にいよのかみなにかしあそんまいりて内にかうくのこと侍なると申をきかせ(22ウ)給御心ちともいかゝは有けんさらは(に)うつゝの事とおほされすのほり給つらんあとにいま一たひ見んとの給よりほかに物もおほえ給はぬ御けしきながら御さうそくなとかたのやうにしていてたまひ

ぬるをはゝ宮はたゝ御そを引かつきてなきふし給へるよはいかに成ぬるそと見ゆるまでとのゝうちさはきたり御車そひこせんとともまいりあへすみたりかはしきよの御有さまなりみちすからのほりはて給なん跡をみん心ちにあすまで世にありなんやとおほしつつけらるゝになかれ出る御涙ちくまの川わたりけるにやとみえたりみちのほとれいよりも(23才)とをくおほされて人にひかれていり給にこゝのへのうちも物さはかしけもなしひたぎやの程もつねよりもあかくみえわたりてこゝかしこのはさまへいのつらなにも物いふこゑくたゝこの事なるへしときゝ給にさてまことにのほり給ひけるにやいかにいふそとおほすに心ちもまとひてたふれ給ふ(ひ)ぬへし殿まいらせ給へと人々たさはくに中將きゝ給てこのことによりてならんかしいかはかり御心まとはし給つらんとおほすもいとおしくて殿上くちにさしいて給へるをおおしけるとうち見つけ給へるそ中くゝいみしきやいかなりつることそをのれをすてゝはいつくへお(23ウ)おはせんとしつるそといひもやり給はすおほゝれ給をけにとゝまらす成なましかはかきりある御いのちもいかゝなり給はましとあはれにみたてまつらせ給ふためらひて御前にまいり給へれば有つる事ともかたらせ給にすへてうつゝとおほえ給はすなに事もいとをしふることも侍らすおほやけにつかうまつりわたくしの身のためもおこのむけにむさいに侍るはいとくちおしく侍れはそのかたはかりはかたのやうにみあかせとやいひしらせ侍りけんましてこのことたはふれにもまねふらんとこそ思ひ侍らさりつれいにかく世のためしにもなりぬへくふきつたへ侍りける(24才)にかめつらかにも思給へらるゝかないかにも又たくひも侍らねは心におとろくことなくていきて侍らんかきりは見侍らんをのみこの世のよろこひには侍るへきにいとつらくなるとこよひはすへてうつし心も侍らすむなしき跡を見給ついたらましかはあすまでなからへておほやけにもつかうまつりわたくしのあまたのほたしともも

みたまへさらましをかはらぬさまをみせさせ給へることゝよろこひ申給つゝいとあやうくうしろめたしとみやり給へるけしきのことばりにいとゝこよひよりは見え給へは人々もみななき給ぬ中将の君はかくいとこちたき御あそひ（24ウ）のなこりものむつかしうあやまちさへしたる心ちし給てさふらひ給ふをうへめしよせて御さかつきたまはするとて

身のしろはわれぬきゝせんかへしつとおもひなわひそあまのはころもとおほせらるる御けしきさにやと心うることもあれといてやむさしのわたりのよるのころもならましかはけにかへまさりにや覚えましと思ひくまなきこゝちすれといたうかしこまりたまひて

紫のみの白衣それならはをとめの袖にまさりこそせめといはれぬるもなにとかはきゝわかせ給はんいつれもむひのをりはなれぬ（25オ）御なかともなれはいとよかりけりつねよりも物あはれなる御けしきにてしつまりてさふらひ給よそひかたちなとおほろけの女はみかとの御むすめなりともならへにくきを二宮はけしうはおほせしとおほしめすなく一こゑにあくる心ちすれは人々もまかて給殿も中将の君もひとつ御くるまにて出給ぬはゝ宮まち見たまへる御けしきおもひやるへしいかにこうし給ぬらんとて御みつかからまかなひてそ^そのかしきこえ給へとまことにくるしうなやましとおほされてこよひはいかにもくふように侍とてやすみ侍らんとてわか御かたへわたり給（25ウ）をいとゝこよひよりはかたとき立はなれ給はんもうしろめたくわりなしとおほしたるけしきにてこよひはこなたにものし給へる（と）せちにきこえ給へはおましなとまいらせてね給ぬるやうなれとめてたかりつることゝも思ひいでられてえまところまれ給はすなにとなく心ちもまことにうかひてありつるみこの御かたちをもかけに恋しく覚え給けにとのゝの給ひつるやうにこの世には有はつましきはしめにやと我ながら心ほそしこわたのそうすめしよせてこの御かたはらにさふらはせ給とのももねたまはす今夜のことゝも

かたりたまへはいともゆゝし（26オ）く覺してあすよりはしむへき御いのりのことなどの給はせてさるへきけいしなとめしあつめてやんとなくしるしあるへき人々してはしめおこなはせ給へき御いのりともこちたけに覺しをきてのたまはするさまきゝふし給てもなとかくしもおほすらんかゝる御こゝろともをしらすかほにあちきなくさるましきことにより身はいかにしなさんとおほゆるに人やりならず枕もうきぬへしあるましきことに返々思ひかへせとあけくれさしむかひきこえなからわきかへり心のうちのしるしもなくてすくるなけかしさはさらにおもひやむへきこゝ（26ウ）ちもせすうへのいみしうき御心さしとおほしめして給はせつる御みのしろはいとかたしけなくおもたゝしけれとかひくしくきまほしくもおほされすむらさきのならましかはとのみおほえて

色々にかさねてはきし人しれす思ひそめてしよはのさころもとそかへすくもいはれ給ぬぬにあけぬといひけん人もうら山しきからふしてあけぬる心ちすれはひんかしのわたとのゝつまとをしあけ給へれば雨すこしふりたるなこりあやめのしつく所せけれとそらはあま雲はれわたりてほのく（と）（27オ）あけ行山きは春のあけほのならねとおかしきにはなたち花にやとかるにやほとゝきすのほのかになきわたるねにあらはれにけりとあはれにきゝ給ふ

夜もすからなけきあかしてほとゝきすなく音をたにもきく人もなしとひとりこちたゝすみ給まゝにしんしきによこんせんたんこむしんみめうとゆるゝかに打あけてよみ給へるいみしうこゝろほそくたうときをはゝ宮おとゝなときゝ給て猶さまゝにいとあまりなるさまかなかくしもおひいてけんまたこそ天のむかへもあれとゆゝしうおほされて宮いさり（27ウ）出給てなとかく夜ふかくはいて給へるそ五月の空は物をそろしかなる物をとの給ふまゝにすこしはなこゑになり給ぬ殿もおきいて給て猶このころはかりは内にもなまいり給そけふより七日はしめさするいの

りのほとはおなし心に仏をもねんし給へなときこえ給にたはふれのくち
 すさひもこちたくむつかしうのみおほさるれはいつちかまかりいてんと
 の給てたいへわたり給ひぬそのころの事にはたゝこのことをあめのした
 にいひのゝしりけりおほやけにも日記の御からひつあけさせ給てあめわ
 かみこと中将とつくりかはさせ給ひけるふみともかきを(28才)「かせ
 給ひけりとしへたるみちのはかせともたかきもいやしきもこの御文をみ
 てなみたをなかりてめてまふをこのころのことにはしたりあつさのわ
 りなき程はいとゝ水こひとりにをもとらす心ひとつにこかれ給をする人
 なしくれつかた源しの宮の御かたにまいり給へはしろきうすものゝひ
 とへき給ていとあかきかみなる文をそ見給ふ御宮(み)はひとへよりも
 しろくすき給へるにひたひかみのゆるゝとこほれかゝり給へるすはう
 しろとひとしくひかれいきてこちたきたなはれたるすそのそきすゑい
 くらをかきりにおひゆかんとところせけるものからたをく(28ウ)「
 とあてになまめきみえ給かくれなき御ひとへにくれなるのはかまに御く
 しひまゝより見えたるこしつきかいななどのうつくし人にも似給は
 ぬはあまり思ひしみにけるわかめからにやとまほられ給てれいのむねつ
 ふくゝとなりさはけとよくしのひかへしてつれなくそもてかくし給める
 いとあつき程にいかなる御ふみ御らんするそときこえ給へは齋院よりゑ
 ともたまはせたとてくまなき日のけしきにはるゝとにほひみち給へ
 る御かほつきをまはゆけにおほしてすこし打あかみてこの御ふみにまき
 らはし給へるよういもてなしまみなといひつくすへうもあらず(29才)「
 めてたく見え給ふに涙さへおちぬへく覚え給まきはしにこのゑともを
 みたまへはさいこ中将の日記をめてたくかきたるなりけりと見るにあひ
 なくひと心なる心ちしてめとまる所々おほかるにえ忍び給はてこれは
 いかゝ御らんするとてさしよせ給まゝに

よしさらはむかしの跡をたつね見よ我のみまようこひの道かはとも

いひやらす涙のほろゝとこほるゝをたにあやしとおほすに御てをさへ
 とらへて袖のしからみせきやらぬけしきなるにみやいとあさましくおそ
 ろしうなり給てやかてとらへ給へるかひなにうつふし給ひぬる(29
 ウ)「けしきのいひしらぬものにとらへられたるやうにおほしたるにい
 とゝ心さはきしてこゝら思ひつる心のうちをかはしたにうちいつへう
 もなく涙にのみおほれ給へりいはけなくをはしましよりさるへきに
 やたうりのまゝの心さしにうちそへ人しれすこゝらのとしころねをたに
 たかくなくよもなくおもひこかれ侍りなからあまりしらせ給はてやみな
 んかたれものちのよのためまでうしろめたう侍るへきによりもらし侍り
 ぬるこそ中ゝあさましけれ又いとかくあるさましきものおもひする人
 のたくひむかしもいまも侍らんやと思ふをあまりかくうとましけ(30才)「
 におほしめしたるこそ心うけれ

かくはかり思ひこかれて年ふやとむろの八しまのけふりにもとへか
 たはしたにもらしそめつればとしをへて思ひこかれてすこし給へる心の
 うちをきこえしらせたてまつり給におそろしき夢を見る心ちし給てわなゝ
 かれ給をむけに御らんししらさん人のやうにかはかりをたにおそろ
 しとおほしたることゝなくゝうらみ給ほとに人ちかくまいるけしきな
 れはすこしのきて今よりはいかににくませ給はんすらんなにはかりなら
 ん御心かはりは中ゝ人めあやしく侍らんおほしうとむなよいはきりと
 をし侍るともをときゝもあるまし(30ウ)「きことゝおもひしりたれば
 よもみくるしき心のほとは御らんせられしあまりにおもひわひ侍りなは
 かよはぬさとにそゆきかくれ侍らんかしさやうならんおりはさそかしと
 おほしめしいてさせ給へかしとてなときこえしらせ給こともおもひやる
 へしされともいとちかくしもさふらはぬ人はいつもけちかき御ならいに
 めもたゝぬならんかしゑみ侍らんとて人々ちかくまいれば宮は御心ちれ
 いならぬとまきはしてちいさきみき丁ひきなをしてふさせ給ぬれば君

もかほのけしきやしるからむとおほせはたち給ぬるに宮はいまそよろつにおほしつゝくるかゝる心おはしける（31才）人を露しらてたれよりもなつかしくおもひてあけくれさしむかひてすこしけるようとうとまじうおそろしきにもさるへき人々の御あたりならておひいてけるをあはれにおほししられてやかてふしくらし給へるを御めのとたちなとれいならぬ御けしきはいかなることとあやしかるにもたれもかゝる御心をもしらぬよかやうにつねにあらははつかしうもあるへきかなとおほすにありてうき世はとけふそおほししられる中將の君もことゝてそめてのちはいとゝ忍ひかたき心のみみたまさりてつくゝとなかめふし給へるにとのゝ御かたよりまいり給へとあれは何となく心ち（31ウ）のなやましきにもうけれとさきゝ給はゝ又おとろきさはき給はんもきゝにくければさうそくしとけなけてまいりたまへりひんのわたりもいたううちとけてないかしろなる御うちとけすかたのうるはしきよりも中ゝ又かくてこそみたてまつるへかりけれと見えてみまほしうなつかしきさまのし給へるをれいのうちゑまれてみたてまつり給より中宮のいてたまはんにまいり給へうへもひとひあまりとりこめたりとおほせられきとのたまひて源しの宮の御ことを春宮のかく心もとなからせ給にいたくわひさせ奉るとうらみさせ給にすゝしくなりてさもや（32才）と思ひたつを右おほいとのゝたゝひとりかしつかるらんむすめのとをにたにならほと心もとなからるゝからうして此八月にまいらせんとけしきとらるゝをせいすへきにもあらすきしろひ給はんもひんなければ冬つかたさらすはとしかへりてなとおもふはいかゝあるへからん春宮もいそかせ給うちもさこそあらめと御けしきあれとなにかは人のいづしかと思ひいそかれむをとゝめんもいとをしかるへしなときこえあはせ給をつゐの事そかしきこそはあらめと思ひなからむねはふたかりまさりてけしきもかはるらんとおもへとつれなくもてなして人のことをのへ（32ウ）させ給はんいとを

しうや侍らんこの御ことはいつも心のとかにてあえ侍りなんこん中なこの身にそふかけにてきはくなればわづらい（は）しきにかくいそかるるとそきゝ侍と申給へはこゝにもさ思ふなり右のおとゝのひすらんむすめこの御かたにえこそならはさらめそうかたちにはなたかにきらゝしきさまにやあらんとそをしはからるゝやはゝめのとよりほかにあたりにもよせすきはなくこそかしつくなれ身つからくゆる宮はらのむすめのやうにやあらんとてわらひ給へはかの思ひかけさりしよひのほかけはいとしもたまのきすはみえさりしかとはなたかはよくいひあて給へり（33才）とおもふにすこしほゝゑまれぬるけしきをしるくみ給てわかゝりし時かひま見をつねにせしかはさもさまゝなる人をあまたみしかな人はいと有かたき物そかし思ふさまなる人にあふ事はかたきわざなりや故院のことゝくはいみしう覚しめしなからこのかたはあやにくにせいしさいなみてたやすくもありかせ給はさりしかとかしこゝぬすまれいてゝいたらぬくまこそなかりしかくさまゝゝえさらぬ人あまたものし給しにをしけたれてあはれと思ひしわたりもありしかとかひなくこそやみにしかなとむかしの事とおほしいてたりわかくより猶やんこと（33ウ）なきかたにさたまりぬはおもりによきことなりひとりあるはをのつからさもあらぬ心もあくかれてかるゝしくわろきことそなの給てかの御けしきありしふえのろくはいとかたしけなき事にこそそのゝちうちゝくにもあないきこえさせぬはいとひんなき事なりよき日してゝうの内侍のもとにほのめかし給へかしなとのたまへはあなむつかしや有はつへき（ゝ）も覚えぬ世にさやうにさたまりめていかにわひしからんときくにさへそあつかはしきよるのころもなりける御けしきかたしけなかりきといひなからさはかりの御事をうけたまはりてき（34才）こえさせいてんや中ゝなめけに侍らんとてすさまじけなる御けしきなれば心にいらぬことなめりとおほすもうへのおほさんこといとをしくてち

まちにこそいはれさらめさのたまはせてんをしらすかほならんはひかくしかるへきわさかなとれいならすものしけなる御けしきなればわつらはしくてたち給ひぬ

ほかさまにもしほのけふりなひかめやうらせあらくなみはよるともなといなふちにくちすさひ給ては、宮の御まへにまいり給へればあつけにやこのころこそいたくやせてみえ給へとて心くるしけに覺したるけしきあくまでらうた(34ウ)「けに見え給を殿のさはかりくまなくみあつめ給けんにおやと申なからもすぐれたる御おほえはことほりそかしと見たてまつり給なつやせはゑせ物のことにかやかたへすゝしきかせにしたかはんもあしかるへきことかはなと」**か**うしもいひそめけんわたしもりにやとはましとてゑみたまへるにほいさとこほるゝこゝちし給へるをめつらしからん人のやうにわかき人々見たてまつる中つかさといふ人みちのはてなるとなつけきし人のありしこそことはりにゝゝからねとひとりこつをしりめにみおこせ給ていかにとかやのこりゆかしきひとりことかなとの給をあなわひしきこえけるにやと(35オ)「わふるさまもにくからすみわたし給とのゝ女二の宮に御ふみたてまつれとのたまひ(へ)るこそたゝさはかりのなをさることたにおほ宮きゝ給てめさましくあるましきことゝむつかり給ひける物をさやうにほめかしいててはしたなめられたてまつらんこそたゝなるよりは心やましかりぬへれたゝさはかりの御けしきにてその夜のめんほくはかきりなりきかし中ゝなる事いひいてゝうへもあされたりとおほされん数ならぬものはすきゝしきこのまでさりぬへからんかけの小草の露よりほかにしる人もなきなとをたつねいててよすかともなれかしさらすは又いく世もあるま(35ウ)「しからん世にほたしなからんよしかしとて涙くみ給へるをはゝ宮御らんして御かほの色もたかひてたはふれにもゆゝしきことなのたまひそいみしきことなりともわか御心にこそあらめものうくおほえ給はんをあなか

ちにもなにかはまいてはゝ宮のさのたまはんにはあるましき**こと**にこそは一日三位の物かたりせしつゐてにふえの音のめてたりしにめてゝ二の宮のことをほめかししはいかゝ思ふらんこのころさかりにをかしけにをはするをゆくすゑのたのもし人にゆつらんなどうへの給はせたとかたりしはかたしけなくきゝすこしてやとこそありしかとのたまふかくたにのたま(36オ)「はゝいかゝはせむと打なけかれてたち給ぬくれぬれは内へまいり給つゐてにまことかのよもきか門はいつれそゝはせ給へはみをきしすいしんこもとに侍るそこと申候しかは又の日みたまへしかはおろしこめて人もさふらはさりしあやしきにかたはらの人にとひさふらひしかはつくしへまかりにけるなかとのかみといふ人のいゑにさふらひけりめのはらからともなん宮つかへ人にあまた候なる中つかさの宮のひめ君のめのとにても侍るなりと申せはさやうのものゝきあつまりたるおりのわさにや少将のめのととかやいひて大なこんの五せちにしたりしされものにやなと(36ウ)「おほしやらる中宮出させ給ぬれはみこさへうちくしたてまつらせ給て三条とのゝ御かたにさはいへとおほやけしくきらくしき御有さまなり内の御使日ことにまいりなとして殿もかゝるほとはこなたかちにそおはします宮の御有さまかたちなとあらまほしうけたかうはつかしけにてもなし給おほきおとゝの御かたはなかのこのかみにてもとかしはにおはすれとかゝるあつかひくさもち給はねはにや我御有さまひとつをはなやかにいまめかしうもてなひ給てわれはとほこりかにをしたちたる御心をきてにそおはしける人よりは(37オ)「いかてとりていてたる御ものこのみなとしていとわららかに人にくからぬ御心をきてなるへしかくさまゝにもてかしつき給御さまともをそあけくれうらやましくおほしたる中將の君はありしむろのやしまのゝち宮のこよなくふしめになり給へるもいとつらう心うきにいかにせましとのみなけきまさらるゝをわか心にもなくさめわひ給てをのつからもやまき

るゝと忍ひありきとも心にいれ給へとほのかなりし御てあたりにるものゝなきにやおはすて山にのみそおほさるゝ春宮にまいりたまへはいりぬるいそなるか心うきことゝうらみさせ給へは（37ウ）「みたり心ちのれいならすのみ侍りてあつきほとはいとゝ宮つかへおこたり侍なりとけいし給へはなにこゝちにかつねにあしかるへきそ思ひ給ことそあらん我にはへたてすのたまへとちかうむつれかゝらせ給へは心ちのあしかるはかりは何ことをかおもひ侍らんこれ御らんせよかくやせ侍しぬへきなめりとてさし出給へるかひななどのしろくうつくしけなるさま女もえかゝらしかしと見え給源しの宮はかくやおはすらんとあちきなくよそへられ給てせちにひきよさせ給をあなむつかしあつく侍にとひこしろひ給へる御あはひいとをかしかくやせ（38オ）「そこなはるはかり思ふらんことこそ心えたれなかつみのしゝうかまねし給へるなめりな人もさそかたりしおとゝもかゝればつれなきなめりといまこそおもひあはせらるれとまめやかにの給はするを人のとふまで成にけるよといとゝくるしけれとつれなきさまにてさらぬすきくしさをたにこのみ侍らぬになと有かたき恋の山にしもまとひ侍らんと猶ごとすくなゝるけしきやしるからんあなうたであるやうあるへしとの給はするも御こゝろならひなめりとてわらひたまふ

わか心しとろもとろに成にけり袖より外に（38ウ）「涙もるまでとそ思ひつゝけるゝ心ならひはけにさもやあらんまことならぬいもうとをもたらねはなといひたはふれさせ給てせんえう殿にわたらせ給ぬればこよひはかひもあるましきなめりとすさましくてまかて給ひぬたそかれ時のほとに二条大宮の程にあひたる女くるまうしのひきかへなとしてとをき所にかへると見ゆるに物みすこしあきたるよりまろかしらのふとみゆるはこの御くるまを見るなるへしはやくやり過ぬるをあやしひかめかとおほすほとにともなるわらはへのもたる物やしるからんこの御ともの

人みつてかやくとおひとゝむるにえに（39オ）「けておひとゝめられぬ御すいしんのいたくとかめかゝりてしたすたれかけ給へるはやんことなきそうにこそおはすらめきはありともしはしをしとゝめてあやにくにやりちかふるはたそくゝとあらゝかにとへは仁和寺のなにかしあさりの御くるまにてはゝうへの物にこもりていて給ふなりとわなゝきいふわらはのあれはいてさはあま君かみんとてすたれをひきあくるに法師はしりおりてかほをかくしてにくるをこのあま君はなにくるそをいではしりのゝしるを御くるまをとゝめてかくなせそとせいせさせ給へはうしかひわらはをとらへてなにもそのくゝとへは仁和寺（39ウ）「なにかしめきしと申人なりとし比けさうし給ふる人のうつまさに日ころこもりたまへるかいて給をぬすみいて給なり法師たてらかくあなかななるわさをし給へは仏のにくみ給てかゝるめをみさせ給ふなりかしをしととめてしめやかにもやらせ給はてとしころの思ひかなひていそき給ほとに女くるまとそ御らんすらむたゝとくやれとせめ給へは師にはしたかへといふ法文をそうのあたりにとしへ侍りぬるしにきゝならひてはしらせ侍りつるなりいまよりはさらにくこのしにはしたかひつかはれしとおそろしかなしとおもひたるを（40オ）「かしうなりてゆるしてけり君にしかくなん申つくるまにはまことに女のおはするなめり人はみなにけ侍りぬかくて打すてゝはいとをしうこそ侍へけれと申せはなにしかゝるわさをしつるつねにせいする事をきかていくらんとところはいつくにかあらんいかてかさてはすてんそのわらはにとひておくれとの給へはわらはのまかりつらんかたもしり侍らすいまさりとくるまとりにありつるほうしまうてきなんこのわたりにかくれてそ候らん御たいまつまいらてくらふなり侍ぬとて御くるまつかまつれといへとぬすまれたらんはいま（か）やうなる人ならん（40ウ）「心ならぬことならはいかはかりわひしかるらんくらきみちのそらにさへさすらふよかくてすてゝは有

つるほうしほいのまゝにやゐてゆかんざらぬにてもこよひかくてあらは
 いかなるこゝちせんなどおほすにいとくをしければをくるへき所もし
 らすこよひはかりはとのへやゐてゆかましとおほすもけさうちかつきて
 はしりつるあしもとおほしいつるもをかしくみちのほとてやふれつらん
 と心つきなくゆゝしきにあすかるにやとりとらせんこともかたらひにく
 くおほさるれと猶いかなる人のかゝるめは見るそとゆかしければひきか
 へしあのかくるまにの(41才)「りうつりてみ給へはいとたとくしきほ
 となれときぬひきかつきてなきふしたる人ありけりあないをししいかな
 る人のかゝる道のそらにたゝよひ給そいかなることありともひとりうち
 すとゝ心うくにけぬる人はつらくはおほさすやよしのゝ山にとは思はさ
 りけるとこそみすてゝまかりなはいますこしおそろしきこともありなん
 又ありつるかしらつきもまろいぬとみはきもこそすれまことに御心なら
 てかゝる事ものし給ならはおほし所をしへ給へおくりきこえんなをほい
 もありあの人とわたらんとおほさはまかりなんと給こゑけはひのきゝ
 ならはすあ(41ウ)「てにめてたきはさはかりにやと見え給ふを誰にか
 とおほえなくはつかしけれとかくの給にきこえすはけにすてゝこそおほ
 せめさらは有つるゆゆしきものゝきてゐてゆかんこと思にかなしければ
 ほのくおほゆるまゝにきこえんとおもへとたゝわなゝかれてとみにも
 のもいひいてられすたゝなきにのみなきまさるけはひなとよそにて思ひ
 つるよりはあてにらうたければくるしうなり給てさらはまかりぬへきな
 めりな御心ならぬことゝきゝつればさもやといとをしきになんかな
 き給ふこのわたりにそのすらんよもみすてきこえしとけしきを見ん(42
 才)「とてのたまへはおほしぬへきなめりといとわひしきにいひいて
 ん所のさまのはつかしき又はかくしうもおほえぬになきこゑはまして
 いとわりなけれとほり川いつくとかや大なごんときこゆる人のむかひに
 たけおほかる所とおほゆるをさらにいかてかといふけはひいとらうた

けにをかしきはいかにおほすらんといまそあさましくはつかしきつま戸
 なるへし人あけてこゝにといへはくるまましよせたるに五十はかりなる
 をもとのしなくしからぬさましたる火をいとあかくともしてなといと
 おそくおほしましつる御くるまのをそかりつるかたい(42ウ)「ふの君
 やまいり給へるとてよりきたるほかけすかたのみしらすあやしきもうと
 ましくおほえ給てなき人きたりとてうちもこそすれとくおりたまへとお
 こし給へと火さへあかくてかたはらいたくわりなきにとみにうこかれぬ
 をひきおこし給へればきぬなといとあさやかならぬうす色のなよらかな
 るにかみはつやくとかゝりていとわりなうはつかしと思ひたるけしき
 なとなへてのさまにはあらすたゝいとをかしき人さまにそ有けるあやし
 う思ひのほかなるわさかなたれならんみてやみなましかはいかにくちを
 しからましとおもふ物からさるへきにやかゝ(43才)「るうちつけ心な
 とはなかりつる物をいてやうとましかりつるかしらつきにてなれつらん
 ことおもへは猶心つきなけれとかゝる道行人をゝろかにはえ覚ししらし
 な有つる人に思ひをとし給なよとの給ふにいとつかしくておりなんと
 すればひかへてなといらへをたにし給はぬ道のしるへをうれしとおほさ
 ましかはとまれとはの給なましあな心うとゆるし給はねは

とまれともえこそいはれねあすかるにやとりはつへきかけしなけれ
 はといふさまそ猶その水かけみてはえやむましようおほされける(43ウ)「
 あすかゐはかけまほしきやとりしてみま草かくれ人やとかめんく
 るままつほと人に見せてをき給たれよとており給ぬるをあなくるしひん
 なきものをとくるしけに思たれとまことに御くるまのをくれたりけるま
 ち給とてやかてそのはしつかたにひきとゝめ給へるに月ははなやかにさ
 し出たりをんないとはしたなしと思ひたる物からいたくきえいりたるも
 のはちにはあらすたゝいとなつかしうをかしきさまのもてなしなとあや
 しきまてらうたけなり家の人々いかなることとあやしかりたちさはき

たり御くるまゐて（44才）「まいりたるにやときゝ給へとかはかりにて
 たちいつへき心ちし給はねは有るいのりの師やいりこんと物をそろし
 なからとかくかたらひ給女たれとたにしらぬわりなしと思ひたりきみは
 おもはずなりけるちきりのほとあさからすあはれにおほさるゝ事かき
 りなし物きたなくうたかはしかりつるいのりのしきよさもみあらは
 してはわかくすくせのありてさる心もつきけるにやとまであさからすおほ
 さるかねていみしう心をつくしやんことなきあたりよりはならぬ草の
 まくらもめつらしくてそののちはよひあかつきの露けさもしらすかほに
 （44ウ）「まきれありき給よなくおほくつもりにけり此女はうちの中な
 こんといひける人のむすめなりけりおやたちみなうせてければめのとか
 そへのかみなといふものゝめにてなまなくありける又なきものに思ひか
 しつきてとしころ有けるをおとこうせてのちはわりなき有さまにてすく
 しければこの仁和寺のいのりのしをかたらひてこれにこの君のことをも
 しりあつかはせければおほけなき心有けるものにて人しれす思ふ心つき
 てかゝるわさはしたるなりけりくるまなとも又かる人なくてうつまさに
 ゆききのたよりをよるこひてぬすみもて行なり（45才）「けり有つるう
 しかひそこにきてもかたりければいとあさまじかりけることかなたれと
 いふ人さるわさをし給つらんわか君いかになり給ひつらんいきて見よな
 といひさはきかくをはしたるなりけりそのゝちいきしはをとせねはこ
 とはりにいとをしくて人やりたれと返ことをたにもせねは思ひなけくこ
 とかきりなしこの人かくてやみ侍なは御まへの御あつかひもいかてかは
 し侍らんゆゝしきわさかなはやう源しの宮の内まいりとてやんことなき
 人々のまいりつとひ給なるにまいり給ひねをのれはいつちもまかりなん
 このおはする人はたれそ（45ウ）「とよあやしう忍び給は御まへ
 にはしらせ給へりやといへはしらすよろつたゝ心よりほかにあさましき
 有さまなれはとてうちなき給をさすかにあはれとみてわれも打なきぬ又

ある人々一日もみかをとむこにたゝかせ給しにあくる人もなかりしかは
 おはしますをいとひまいらするかへたうとのゝ御ことはしらぬかいたう
 あなつりたてまつらはかとのをさなといてきてこのかとあけさせんなど
 いひはへりければいとこそおそろしくされはまれくあるものもこのこ
 ろはおちてまうてこすいとそわりなきやあてにやんことなくめてたしと
 ても（46才）「この定にてはいかゝはせんとしおひて侍れはゆくすゑの
 ことも思ひ侍らすあつまのかたへ人のさそひ侍にやまかりなましと思ひ
 侍るをたれに見ゆつりてかと思もほたしにてそおはしますやといへは打
 なきてたれをたのみてかはいつくなりともおはせん所へこそはまたみを
 き給はんも心やすくやおほすへき思ひかけぬ有さまをはいかにもあるへ
 きことならねはとの給ふもあはれに心くるしければまことにしるへなく
 たよりなきに思ひわひてみちのくにおくのさうくわんといふものゝめ
 になりてやはいなましと思ふなりけりきみはみなれ給まゝにあはれさま
 さりつゝ（46ウ）「なをさりことにはあらすぢきりかたらひ給ひぬへし
 さるはこれにをとるへき人もみ給はすわか心もすくれてこの事のめてた
 しなとわさと御心とまりぬへきゆへもなけれとたゝそゝろにみてはえあ
 るまじういとをしく心にかゝらぬひまなくわれながら物くるをしきまで
 におほゆるをこれやけにすくせといふ物ならんかくのみおほえはくちお
 しくも有へきかなと日にそへてえさりかたうあさからすのみ覚え給へは
 我ながら思ひしらるゝものからまたるゝよなくもなくまきれありき給
 こと月ころにもなりぬ御との人々はまたかゝる事はなかりつる物をい
 かばかりなる（47才）「きちしやう天女ならんとさるはいと物けなきけ
 しきなるをとをのゝいひあはすへしかくいふほとにこのめのといてた
 ちいとすかやかなるけしきにて見をきてまつるへきにもあらずさりとて
 又かゝる人さへおはしますめれはいかてかはくしたてまつらんとするい
 かにしてすこし給はんとすらんといひつゝけて打ひそみなくをしはしの

程たにおはせざらんよにはあるへき心ちもせぬをましていつをかきりに
 かとゝめをかんとは思給らんかくよろつに所せき身をいかにもうしなひ
 てこそいつくへもなといひもやうす心くるしけなれはさらはいて立給へ
 きにこそあ(47ウ)「なれ御心さし有ける人をみすてまつり給てあさ
 ましきありさまに引くせられたまはんもいとあるましきことゝおもひ給
 ふれとかくの給はすれはなとさすかにことばを返々いひしらせつゝたゝ
 いてたちにてたつを見るにさらはいまいくかにこそなと人しれすかそ
 へらるゝにいと心ほそけれとたれとたにしらせたまはぬけしきもさすか
 にたのみかくへくもあらぬにかくこそなとほめかしきこえんも御こゝ
 ろのうちをしらねはつゝましくてたたなにとなく思ひみたれたるけしき
 なるを猶かくおほつかなき有さまのたのみかたくつら(48オ)「きにや
 と心くるしけれとまたわか行ゑをもあまの子とたにならねは心くらへ
 にてたゝあはれにおほえ給まゝにいひなくさめつゝこの世ならぬちきり
 をそかはし給ひけるかかる程に夏もすき秋にもなりぬ源しの宮はふる
 き跡たつね給へりしのちさやかにみあはせたまはすことのほかなる御
 けしきをされはよとつらく心うきにいまはたおなしにはなるとひたふ
 る心もいてきてさるへきひまを見給へと人めこそかはることなけれとあ
 さましくうかりける御こゝろはへのうとましようおほされて又いかてかさ
 るみゝをたに(48ウ)「きかしとようゐし給へはいはまの水のつふく
 ときこえ給ふへき人まのほとたにそささらには有かたかりけるひるつかた
 まいり給へれは大宮もこなたにおはしましてもろとにもこうたせ給なり
 けりとくまいりてけんそつかうまつるへかりけりとてちかやかに給へ
 るにちいさき御木丁なともをしへられてつねよりもはれくしければ宮
 はいとはしたなしとおほせとはゝ宮の見たまへはれいのやうにもえそむ
 き給はず御かほはいとあかくなりてこもうちさしてこはんにすこしかた
 ふきかゝりて御あふきをわざとならず(49オ)「まきはし給へる御か

たはらめ御ひたひつき御くしのかゝりなといまはしめたることにはあら
 ねとうちみたてまつることに猶たくひあらしと見え給ふ御有さまのうつ
 くしさはちよを一夜にまもりきうゆともあく世あるましくおほゆるにも
 あすかゐのやとりはたはふれにてもあるましく覚え給にいとゝしきなみ
 たこほれ給ぬへければまきはしに御かちはたれそなとさてはちはなと
 きこえ給へと見つけたてまつり給てれいのまつこと事おほしたゝねは大
 宮もなをともしきこえ給はてよへ内よりたひくたつねさせ給しはいづく
 に(49ウ)「ものし給しそ猶かのしゝうの内侍のもとにせうそこものし
 給はぬはひかくしきことゝむつかり給めりきこゝにはたゝなにことも
 御心にまかせてと思にいさやいかなるへき事にかとうちなけかせ給へる
 も人のおやけなくわかうをかしき御ありさまなりその御いらへはいかに
 ともしきこえ給はて殿のれいならぬ御けしきなりつるはこのかんたうにこ
 そ侍りけれとうゑんのにしのたいの御しつらいはなに事にかときこえ給
 へは故きさいの宮に有けるはくの君のむすめはかこつへきゆへや有けん
 はゝうせてのちいとあはれにてなときこえ給けるをかのうへむかへとり
 (50オ)「てつれくなくさめにせんとなんの給とそありしきやうのれう
 にやあらんおのこゝのいとあやしきもあなれと宮の少將にゝたりとてか
 の宮のこにし給となんきゝしそもさるへきやうや有けんなどの給はすれ
 はそれもとのゝ御こにてあれなにかしには似ぬにやあらんはらからあ
 またもたる人こそうらやましけれとも忍ふへき人たになきにとて物あは
 れとおほしたるけしきのけにたゝみる人たに心くるしけなる御さまなれ
 は大宮れいのゆゝしきことにくちなれ給へるこそ心うけれとていといま
 くしくとおほしたるをかはかりのことをたにかくおほし(50ウ)「た
 るにゆくすゑはかくしかるましき心のうちを御らんせさせたらはまし
 ていかなになとおもひつゝけらるゝになみたもこほれぬへしちいさき木丁
 に宮はまきれいり給ぬれはすさましくてはしつかたに人々と物かたりし

給に御まへのこたちこくらくあつかはしけなる中にせみのあやにくに鳴いてたるをみ出し給て

こゑたてゝなかぬはかりそ物思ふ身はうつせみにおとりやはするなとくちすさひにいひまきはしてせみくはうようにないてかんきう秋なりと忍びやかにうちすんし給御こゑめつらしけなきことなれとわかき人々はしみかへ（51才）「りめてたしと思ひたることはりなりさはかりあたりまてにほひみちてむかひたてまつる人はものおもひもわするゝやうなるあいきやうなとをひとへにほこりかにもてなし給はていたくしつまりて心ちよけならす思ふこと有けにのこりおほかる御けしきにておりくゝはものおもはしけに心ほそけなるくちすさひなとのみし給へはあらきゑひすもなきぬへき御さまなり日のくれ行まゝにひもときわたす花の色くゝをかしう見たさるゝにそてよりほかにをきわたす露もけにたまらぬにやとなかめいたしてとみにも立給はすむしのこゑくゝのもせの（51ウ）「心ちしてかしこましましきまでみたれあひたるをわれたにともとかしうおほされけり月いてゝふけゆくけしきにかのほとなきのきになかむらんありさまもふと思ひいてられたまふおほろけならぬおほえなるへしおはして見給へはおほしやりつるはしるくしとみなともいまたおろさてはしつかたにそなかめふしたりけるこさらましかはとあはれにて袖うちかはしこまやかにかたらひ給にひるの御有さま思ひ出らるゝによるつにこよなきめうつしなとにはなにのなくさむへきそとおもひいてられなからわきとけたかくまことしきよりは中くさまかはりたるうちと（52才）「けなとよりはしめ物はかなけにらうくしからぬもてなしなどのあやしきまでらうたくみてはえあるましくおほせは思ふことかなふましくはありはてしと思ふ世にほたしとまでやならむと思ひつゝけらるゝにもろきなみたはまつしるをいかゝ心うらんつねよりも物なけかしけなるけしきのあはれなれはひさしう世にえあるましく心ちのすれはよの人などのや

うなる心はへなともことになくてすくしつるをいかなりけるちきりにかはなくみそめきこえてのちはみすてんことのあはれにおほえ給をさらはいかゝおほすへきそをたにのちの（52ウ）「とたれいひけんあふにはかへまほしかりける物をとてをしのかひ給へるそてのすこしぬれたるなとさやかなる月かけにこれは猶きゝわたる人にこそおはすめれわか身のほとを思にも猶たのむへき御有さまかはかやうに覺しすてさらんほとにかりのはかせにまよひなんこそ心にくからめと思へはけに涙とりあへすこほれぬるを（も）はしたなくてかほをふところにひきいるまゝに

花かつみかつ見るたにも有物をあさかのぬまに水やたえなん物はかなけにいひなしたるけはひなとわかひたるものからいとらうたし

としふとも思ふ心しふかければあさかのぬま（53才）「に水はたえせしかくいとうきたることゝおもひ給ともなからへては心のほともいまみ給ひてんならはぬなをさりことなとは人にいふ物ともしらさりけり心よりほかのことをのつからあるともわたくしのこゝろさしはかはらしとなん思ふなと心ふかけにかたらひ給まゝにいとかなしくなりまさりて猶かくとやほのめかして御けしきを見ましと思ふも思ひたつもすこし人々しきかたさまにたにあらず中く覺しやらんにもあさましうはつかしければたゝ行ゑなくてやみなんとおもひとるかたはつよき物からあさましかりける心のほとかなとしはしはいかにおほし（53ウ）「いてんすらんとおもふにせきやるかたなき袖のしからみを君はたゝひとへにわかひたるさまにてわか行ゑなきもてなしなとをつらきかたに思ひたると心え給ひてとかへる山のしゑしはとのみちきり給ひけりまことやかのおほきおとゝの御かたにははくのひめ君むかへとり給てにしのたいのたまをみかけるにしつらひすゑ給てみ給ふにあてやかにさてもありぬへきさまなれはとし比のほいかなひてはれくともてかしつき給さまよつかぬまでみゆるとのゝうちにも世の人もしかりけるさいはひかなとめてけりと

しは廿にそなり給けれといた(54才)「くおほときすきてあまりいはけ
 なく物^はかなきさまにてけにおほろけに思ひうしないうむ人のはか
 くしきなくはうしろめたけにそおはしける心におもひあまることあり
 とも色にいたし給へうもあらずことのほかにあさましきことなりとも人
 たにもてなさはをのつから忍びすくすへくおはするをよき女のかしつか
 れ給たるはかくこそおはすへけれとみゆる物からあまりむもれ給へるけ
 しきなどはかくはなくともてなされ給へる御有さまにはたかひてゆく
 すゑやいかゝ見なされ給はんときくるしかりけりまたなき物に思ひかし
 つき(か)れたりしおやの御もとに(54ウ)「てたにかくはるけ所なか
 りし御心はへのまいてにはかにはゝにもをくれかなしくせしめのとも打
 つゝきうせにしかは心のうちにはいとかなしかりけるにまめやかに思ふ
 人たにそはてかくしらぬ所にむかへられて有つかすはれくしくもてな
 され給にいとわれにもあらぬ心ちしてほれまとい給へりうせにしはゝの
 なましそくのたかきましらひして人数ならて世にありわふるさすかにゆ
 へつきもの見しりかほにてかたはらいたき物このみさらすともとおほゆ
 るありけりをはのあま君かゝる人よひとりてそへたるけにゆへくしく
 はゝしろにそひてわたりたる中(55才)「中見くるしきをうへ時々見給
 にいてやとものしく見たまへは(と)こまかなる御心さまにはあらてさ
 すかにおほとかにて人の有さまなとはいたうも見しり給はす心をやりて
 うへはかりはかしつき給にこの御はゝしろそあしくせはかたはらいたき
 ことも有ぬへかりける心にまかせたるつくりおやともしたてたるわかう
 とのおもひやりすくなきかきりかすもしらすあつめさふらはせてよると
 なれば殿上人諸大夫までいたしあはせてさくけしきともいといまめか
 し君はたゝあかこのむつきにつゝまれたる心ちしてあれにもあらずまか
 せられ給へりしつらひ有さまなと(55ウ)「のめてたくおなしわか身と
 もおほえぬなとを人しれぬ心のうちにははゝやめのとなとにこれを見せ

たらましかはいかて人なみくになさんとあけくれいひ思ひたりし物を
 よしなき人にまかせられて心におもふ事もいはまほしきこともつゝまし
 くはつかしうてやみにむかひたるやうにおほゆることとおもひつゝけて
 は忍びてうちなき給けりされとたゝみるにはうつし心もなきやうにてそ
 おはしましける九月ついたちころなをしものゝあるに中将の君中なこん
 になり給ひにけり大殿これをもいまくしけにおほしたれとさのみやと
 てしたいのまゝにあ(56才)「かり給なるへしよろづこひ申に内春宮な
 とにまいり給とてつくるひたてゝまつとのゝ御かたにまいり給へるにか
 たち有さまなとつかさくらゐにそへてゆゝしけにのみ光まさり給をこと
 いみもしあへ給はぬけしきにてたちゐつくるひ給けしきそことはりにも
 すきてかたしけなくあはれなりける大殿の御かたにまいりたまへるつゐ
 てにこのいまひめ君のすみ給にしのたいのまへを過給まゝにいかやうに
 かとけしきもゆかしけれはわたとのよりすこしのそきたまへはみす所々
 をしはりて人々あまたけはひしてこほれいてたりかのきさいの宮の人々
 もあ(56ウ)「またなんわたりまいりけると人のかたりしも心はつかし
 うまた見給はぬあたりなればようゐしてあゆみいて給へれば人々見つけ
 ていりさはくけはひともしものさはかしきをあやしとみ給に木丁とも
 おくよりとりいてゝかはくそよくとたてわたしすそうちひろけひも
 とものよりはれたるをとひきかくひき廿人はかりたちさまよひつくるひ
 さはくきぬのをと木丁などのをとに物もきこえずあはたゝしくみつかぬ
 心ちし給へといまやそゝきやむと物もいはてつくくゝとゐ給へは^から
 うして木丁たてゝのちをのゝきぬのすそ袖く(57才)「ちわらはへのか
 さみのすそなどのみたりかはしくなりたるをつくるひめてこゝかしこよ
 りをしいてわたしやうくのとまるにやとおほゆるほとに木丁のほこ
 るひをばらくゝゝきさはくをともしるくてひとり(つ)ほころひより
 五六人かほをならへてまつわれみんくゝとあらそひたるけはひともの忍

ふるからにいとかしかましからうして見えたるにやあらんまことにめて
たかりけりあな物くるはしや日比みつる殿上人などはたつちなりけり
ときゝめきあへるいとをしうおほえて此みすのまへはいままでうゝ
しう侍けるもとかめさせ給へくやとらみまいらすな（57ウ）」との
給御けはひけにおほろけの人はふといらへにくけにはつかしけなれはに
やそこらいいしときこゆる人御いらへきこゆるはなくてそゝやまろは
ふようなり君の給へくときしるひさゝめきたちてにくるともゝあり
あなわりな物にくるふかまろはましてふようなり《こせたりイ》とてそゝ
はしるなれはきぬのすそをとらふるにやたふれぬきうゝとことさゝめ
きわらひいりつゝしはふきにしいるもありあるは又あなかまやゝさは
かりはつかしき御有さまになへてのほとゝ思給かなともせいすなりさま
くゝあやしき心ちし給てしりめはつかしけにみい（58オ）」れつゝなけ
しにをしかゝりてゐたまへるけしきこのみすのまへにはあはすそありけ
る猶たゝきえいりゝあふきなと打ならしつゝわらひそほるゝけはひと
も物くるをしけれはこはいかにとようるまのしまの人とおほえ侍かな
とてすこしほゝゑみ給けしきなとみすのうちはつかしけなりおくより人
よりきて木丁のまへなる人にたゝうらみをはゝとよみかけよとさゝめく
なれはわきみそなかめこゑはよきまろはさらにくゝとわらひいれはあな
まはゆの色このみやとてかたのわたりをあふきしていたくうつなれはた
うしは君な（58ウ）」しとてつむなるへしあしうしてけりいたしゝそ
こははなてゝ忍ひあへぬこゑいつくならんとをかしきにしぬへけれは
たちのきなんとするほとおとなしきこゑのたかやかにしたりかほなる
いてきていてやさふらふ人々からこそよき人はをかしき名もとらせ給わ
さなれかはかりにてはわかうとたちさふらひ給はて有ぬへしとさすかに
忍ひてにくみわたしてさしよりてきこゆめつらしき御こゑこそおほした
かへたるかとまて

よしの川なにかはわたるいもせ山人たのめなる波のなかれてとけに
はゝとよみかくるけは（59オ）」ひしたとにのとかはきたるをわかひや
さしたちていひなすこれそのはゝしろなるへしときゝたまふ
うらむるにあさゝそ見ゆるよしの川ふかき心をくみてしらなんおほ
つかなき心ちし侍るにうれしき御けはひと思ひ給へるにものをこそあし
さまに申ない給ぬへかりけれとの給へはさはやかにうちわらひてさらは
いまよりのけさんもまめやかにつとめさせ給へかしわかき人の思ひむせ
侍めれはいぬもきてとかやたかやかにいふあやしきたとへなりまめやか
にはおもてふせにやおほさんとていまゝてまいらさりつる（59ウ）」を
けふはかはるしるしにも御らんせられになん御前わたりにもかくときこ
えさせ給へこのみすのまへもならひ侍らねはしたなく思ひ給ふれとか
くこんのうすさにけふはかりはなくさめ侍をいまよりのちそうらみ申へ
きとてたち給におきのはかせあららかに吹うこかしたるににわかみす
をたかく吹あけて木丁もたふれぬれとゝみになをす人もなしあなわひし
あれをみたまへといひつゝわれゝはきぬを引かつきつゝひとつにまろ
かれあひたるをのとくゝとみいれ給へれはかうそめのにひ色のひとへく
れなひのはかまきは（60オ）」みたるをきてひるねしたりけるか人々の
さはくにおとろきてあへなくおきあかりたるをいよく見あはせたるあ
さましきにやとみにそむきなともせずあきれたるかほいとをかしけなめ
りこちなわさやとは見えなから女はうのけはひとよりほこよなくみ
つへかりけりとおもひまし給ぬかのせうとのかこちけんゆへにや少將に
そよく似たりけるとのゝ御子とはいふへくもなかりけりとみるにたゝな
らすや思ひ給ふらんやうのものとあやしの心やと我ながら心つきなしはゝ
しろからくして木丁なをしつればたちのき給（60ウ）」ぬ又の日とのゝ
御まへにて昨日のことゝも申給ふつゐてにかのとうるんにはものしたり
きやにしのたいにすむなる人をこそまたえとふらはねいかやうなるけし

きに見ゆるとの給うちく有さまのいとあやしき子をなからまいかに
 見給ふらんと心はつかしうおほすなるへし木丁のほころひあらそひし
 きかけともおもひいてられ給ていとをかしうねんするけしきやしるから
 んうちわらひ給てよしなきものあつかひこのみ給ほとにたかためも中
 くなることもやとこそ見ゆめれとし比もかういふ物ありとはきししか
 と(61才)「おほえぬことなればかやうの人のすくなきさはひにもと
 りいてぬをなにのたよりにかくもありそめにけるにかいとありつかすや
 とうめき給もけにときけとあさましとあきれ給へりしかほはさすがにく
 むへうもなかりつればつれくにおほしめさんにこと人よりはなとてか
 あしうも侍らしたしかなる名さししてさすらへたまはんもいとをしう侍
 るへしとその給いさやかういひそめけんもおほえなくそあるやよめに見
 しかは宮の少將にそいとよくにたりしせうとのしれものあんなりそれ
 かの宮の御子とそいふなるこれも(61才)「さるへしなとの給まことか
 のあすかぬにめのとみないてたちて君をはとむるをたれもいかにして
 かはあらんとなくくしたまひきこえ給もことはりにいとをしきりとて
 いまは我とまるへきならねはわりなきよしをいひきかすればさはわれも
 いてたつへきにこそと覚したつに人しれぬ音をのみ鳴て思ひなけきたる
 けしきいとくおしきをみるにさらはなにかはくたせ給京もたよりなく
 てひとりとまりたまはんこそうしろめたう侍れ又われもいかてかとも
 おほさぬ女は千人のおやめのとやくなし御おとこをはせぬほとなりまし
 て(62才)「かくやんことなきたのもし人にもおはすなり御心さしもね
 んころなるめるをひきはなれてあつまちに立そひ給はんいとあたらしう
 かたしけなしなとさすかにあるへきことはいひなからいかに思ひかま
 ぶることにかあらんこの人をはするよるあかつきのかとをもころやす
 からすかきうしなひかちにもてなしてつふやくけはひを御ともの人々き
 てめさましくあさましきにふみこほちていらまほしきおりくありけり

殿にも忍ひてたれと思ひ侍るにかくなと申せは女のけしきのあやしき
 もこのほかけのおい人のな(62才)「をありしいのりのしにとらせんと
 するなめりさやうのこといひはえいててむすほれたるなめりと心え給
 にいと心つきなくゆしけれと女君の有さまのいてやされはとてやむへ
 くもおほされねはしらすかほにうせまかせたらんもうしろめたくいかに
 せましきふらふ人々のつらにてやつほねなとしてとおほせとさりとて
 ていてあつかはせ給はんこともいとくはかりおほく人しれす思あた
 りのき給はんにはたふれにても心とくむる人ありとはきかれたてまつ
 らしと思ふ心しふかければさてもえあるましさらてはさすがにこかし
 こともてあつかひ(63才)「給はんもいかにそやおほされつ今をのつ
 からわれとしりなはえいとほしかくろへぬへき所もあらはありさまにお
 い人のにくむしたかひてなとおほすなるへし女君にもまろいとふ人のあ
 るなめりなことはりなりやたのもしけなりしいのりのしを引たかへてか
 くものはかなき身のほとなればをとなしのさとたつね出たははいさ給へ
 よわつらはしき人のさすかなるかあればしはし人にしらせしと思へはか
 くおほつかなくあたなるものに覺したるもことはりなりわれはなに事
 にかあなかちにしられしとおほさるへきいひしらぬしつめ(63才)「
 なりとも是よりかはる心はあるましき物を猶たのむ心のなきなめりと
 うらみ給へはさそふ水たにあらましかはともあはれに思ひて猶別当の少
 將とおもはせ給へるなめりせいする人のありとの給ふはとおもふにも
 ちたのみて行かたをも思ひとくむることあるましうおほえなからいと
 くめてたき有さまにてなつかしうあはれにかたらひ給を行さきめやす
 からんにてたにいかあはれならさんもりのうつせみとなみたのおち
 ぬへきをまきはしたるけしきいとらうたくくるしけなりかくいふほ
 とにこの女君たならすなりに(64才)「けり打はへてものをのみ思ひ
 てありしさまなるけしきにもあらぬをた誰もこのいてたちを思ひなけ

き給へるとおもふにめのとみしりていてあないとをしやかくさへならせ給にける物をいかゝせさせ給はんする君になをきこえあはせさせ給て御けしきにこそはしたかひ給はめたれなりともかくなり給へるときゝ給てはよもあたゝしくも思ひ給はしといへとたゝいかなりともたのむへきありさまならはこそあらめさらはともみえぬ山ちのみこそよからめといふ物からかうさへなりにけるを露しらせたてまつらてやみなむことなどいみしうおほゆれとかけ（64ウ）「てもましていひいつへきならねは日をかせつゝなきなけくよりほかのことなしこのとゝ御めのと大二のきたのかたにてあるなりけり子ともあまたあるなかに式部の大輔て来年つかさうへきかかやうの人の中には心はへかたちなとめやすくてすきくゝしう色このむありけりいかなりともかたち心すくれたらん人をみるとめなどもなくてすくすにこの女君うつまさにこもりたりけるをのそきてみて思ふさまなりければせうそこなものとせしかと身つからはきゝもいれぬにこのめのとはいとみゝつきにおほえけれどたゝいまかくたのむ人にてあるそうのいひち（65オ）「きりたればえいなむましくてたちまちのことうけはせねとつかさえてくたり給はん折はざりやあらんなどちきりけるにかくこと（も）たかひて身はいとたよりなしなまきんたちのかくろへて時々よくおはするはいとふさはしからねはあつまおとこにやつきていなましとおとすなりけりされと式部の大輔のおやのともにつくしへくたるに思ふさまならん人もかなるてくたらむとせうそこいひおこするにいとおもふさまなる心ちして別当の御子の少将なんかよひ給へはさらてもやとあるましきさまにきこえさすれとまことにさもおほさはひめ君にかくとはしらせたて（65ウ）「まつらしくたり給はんほとにむかへ給へといひければいみしうよろこひてさやうのほそきんたちのかけめにておはせんよりはたゝ心み給へをもとの御さいはひにてこそはおはせめなことよくかたらひていてたちの物なといとよけにおこす

れは心ゆきてかみしもの人もとめあつめなしけるをかけてもしる人もなかりけり式部大輔のもとよりはくたりもちかくなりぬるをたかへ給なと日々にいひおこすればたゝあなかもくゝしよもたかへきこえしそのあか月に御くるまをたへさりけなくてふとわたし奉らんといひやりつゝ心のうちにはみないてたちたり（66オ）「さて君にはあつまへのいてたちとまり侍りぬたゝならすさへおはしますにいと心くるしうこのことは申はなちてやりつるなりいまはいかにもおはしまさむをみたてまつりてまかるへきなめりと心ゆきたるさまにていへは女君はまことゝ思ふに心すこしおちゐたまひぬ打はへ心ちさへなやましかりつるものをしからぬ身はいかにもなりなはやといそかれつるもかくなりにけりときゝあらはしてはあはれなりけるちきりのほとさへおもひしられてうき身とおはれつるはすこしいたはしう思ひなりぬるもあはれなりのちたへすなりて御心のほと見はて（66ウ）「すやといまより心ほそくおもふへしのわきたちてかせの音あららかにまとうつ雨も物おそろしうきこゆるよひのまきれにれいのしのひてまきれいり給へりいづもなよくゝと忍びやつし給へるに雨にさへいたくそほちぬれてにほひはかりはいとゝ所せきまてくゆるみちたるをとなりの山かつともゝあやしかりけりつねにあさやかならず打とけたるよひのころものであたりもかやうなるは見ならひ給はぬさへなつかしく心くるしきけそひてあはれはをろかならずかやうのありさまはまたならはざりつる人やりならぬわさかなとてぬれ給へる御そときちらし（67オ）「てひまなくうちかさねても心より外にへたて（つ）るよなくもわりなきをさは思ひ給やかはかり人に心とゝむる物とまたこそしらざりつれなとつきせすかたらひ給さまあはれにて

逢みてはそてのぬれまさるさ夜ころも一夜はかりもへたてすもかなわりなき心いられなとはいづならひけるそとよなとのたまへは

へたつれば袖ほしわふるさ夜ころもつるには身さへくちやはてなん

といふも物はかなけなりよしみ給^へよ世のさためなさこそけにうしろ
 めたけれとなこりなき心はへなとはいかなる人のつかふわきにななどの
 給をもなをさきことゝも(67ウ)「あなちたたらすうとくしきさ
 まにもあらず心のうちやいかならんめのまへはたゝおなし心なるさまに
 もてなしてかくさたかにいひしらせ給はぬをもとやかくやとあなちにも
 もたつねしらす又わか身の行ゑをもさきとていはぬものからなよくと
 打なひききこえたるさまなとあやしうさまことらうたけなるをみつゝ
 まゝにかきりなき人々の御有さまにもをとるましくてわするへき物とも
 おほさきりけりれいの夜ふかく帰り給てわか御かたに打ふし給てすこし
 まとろみ給へる夢にこの女わかたはらにあると思にはらのれいならす
 ふく(68オ)「らかなるをこはいかなるそかゝることありけるをいまゝ
 てしらせたまはさきけるかゝるちきりなりければ何か行すゑもうたかひ
 給とて夢のうちにもいとあはれと思に女

ゆくゑなく身こそなりなめ此世をは跡なき水をたつねてもみよとい
 ふと思ほとにとのゝ御かたよりあすはかたきものいみなりけるをわすれ
 させ給へるかあなかしこゝとより御ふみなとりいれさせ給ふなどの
 たまへるにふとさめてむねのさはけはをさへてうけたまはりぬるよしき
 こえ給へと心さはきしてあやしいかなることそまことにれいならぬこと
 やあらんと(68ウ)「いまぞ覺しあはすることもある心ほそけなりつ
 るはいかなるへし(き)にかあらむなとつねよりもおほつかなくゆかし
 きに夕さはえおはすましければこまやかに御ふみかき給つねよりもい
 まもみてしかなとなんよきりはかたき物いみなれはすさましうなん

あすか川あすわたらんと思にもけふのひるまは猶そ恋しきまことと
 くかたりあはせまほしき夢をこそみつれいと心もとなくなとこまやかな
 れと御かへりことはたゝ

わたらなん水まさりなはあすか川あすはふちせになりもこそすれそ

のわたりとなくすきひ(69オ)「かきたるもさうなとわさとよしとなけ
 れとなつかしうをかしきさまに見ゆるは思ひなしにやかしこにはつくし
 の人あかつきになんゆめくたかへ給ふなといひければたゝあか月にさ
 りけなくくるまをふとよせ給へたかふといふことはあなゆゝしといひ
 やりて女君のひとりなかくめふし給へる所にきてあすのまたつとめてこの
 にしに井ほととていゑあるしもほかへわたりけりいかゝせさせ給はんす
 るくるまのことをたれにいかはましあはれかやうのおりにこそいきしは
 思ひ出らるれかくのみ世の中のたよりなきにこそおもはぬ山なくわりな
 けれいみしう思へと(69ウ)「女は思ふことかなはぬかくちおしきそや
 かゝれはえせ宮つかひ人は忍ひかたらひ人はまうくるそかしまことゝく
 かのするかゝめこそものゝなさけしりていはむことはきかなといひし
 かいひやらんさてこのくら人少將とのゝ御めのとのいゑかりてしはわ
 たし奉らんてうことか侍らん年比のいみしきしる人なりしをこの御こ
 とののちなかくいとつゝましくてをとつれぬをかくとやきゝたらむさ
 るにてもあしかるへきことかはなといひちらしてたちぬるをあなくるし
 ありきもこりにしかはなにかつちいまでもありなんましてそのしらぬひ
 とのいかてかとのたまへはあなまかくし(70オ)「やたゝなる人たに
 もつちいまぬはあるものかまいてかくおはします人はあなおそろしく
 といふよろつよりはかの少將と思ひていかなるひかことかいはんとすら
 ん夜なくの月かけもつねにまへわたりし給ふ御ひかりにみあはすれば
 たかふへくもなきものをものくるをしくよしなきこといひ出てやとかめ
 ん程いかに見くるしからんとおほせとせちにもいかてかの給はんあはれ
 に物はかなかりける有さまの思つゝけてかうまでもさすかに見え奉る
 ちきりはあさからすわれなから思ひしらるゝをこのことまことにさもあ
 らはさりともおほしかすまへ給やうも有なんかし(70ウ)「給ひちき
 りありさまもいつはりにもあらすやなと身もすこしいたはしくなり

たるをこのたのもし人の心やいかにもてなしはてんまたわか身を何とかはさばかりの御有さまになからへて思ひかすまへ給はんつめにはいかやうにならんと身のはてのはか／＼しからさん物ゆへ行ききのあらましことに袖もぬれて源しの宮の御かたへと思ひしもかやうの人に見え奉らんことはつかしさに思ひたゝすなりにしをけにかうをもはすなるさまにても見え奉りけるいまはまいていつくにもくさやうのすちなと思ひかくへきにもあらずかしなといひく／＼てのはてく（71才）は山なしにうしろめたく心ほそく思ひつゝくるにおそろしきことなんなるつゝてにしなはや世にあらずなりなんことのみこそ人をも身をもうらみはてすしてはやまめなとつく／＼ときしかた行すゑ思ひつゝくるに枕の下はつりもしつ／＼くなりぬめのときてよろつ物の物とりしたためさるへき物はぬりこめにをきなとしつゝ京のうちは一夜はかりとおもふましきものそやまいてこの井は五六日にもなりぬへかなりつゝなとたてんまてこそおはしまさめくるまもありかたきにたひ／＼ありかせ給はんもうるさからせ給めるになといへは君このの給へる所へかそれならは猶（71ウ）「ましとこそ思へしらぬ所にいかてかさてはあらむとの給へはさおほしめさはときはとのにわたらせ給へといふは故中なこんのりやうせしにし山のわたりなりけりいさまたそれもひんなしつちをいましと覚しめさは御心なり女か申さんことははかくしきことあらしとかくおはしまさんおりの有さまをもさすかにそれまていきて侍らはあやしの女のみこそみたまつりあつかはめとおもひ侍るかいとまかくしきそやさらぬたにこそこうむところにはとくうといふ物はかならずいてくるそかし御いみのはうにてさへあるよこのたの（72才）もし人の御心はへさやうの程とてもかひ／＼しくもてあつかひ給へうこそみえ給はねいひおもへは女のくにてそ侍らんかやうのきんたちはおやなどの立そひてたのもしきわたりにたにすこしもうしろみやめはうちすて給ひつゝいてやまいてなにかす

とか思ひ給はんあなおこかましや又御こゝろさしあらは所かはるともおはせざるへきことかは恋こそみちのとこそいふなれとさすかに打わららひていふかくほかへいきにく／＼するはこの人によりいふと思なるへしと思ひ給ていてそのことにあらずやあやしき有さまなめれ（72ウ）「はありきも物うくおほえしをいと／＼いさや物こりしてとの給へはさてそれはあしくやは侍るされはこそかゝるさいはひも御らんすれかしこはわかき人のおはしかよはん中／＼をかしかりぬへき所なれば打忍ひて二三日おはするやうもありなむなにかしそれかしと／＼めてはへれば御使にそこ／＼とをしへ侍りなんおはしましたらんにもよく／＼あむない申せよといひをき侍りぬなと／＼むるすんさ《けすい》ともよひたて／＼いふもいと／＼かたはらいたければさまたたつぬる人もあらしといと／＼おほつかなき物にの給を行ゑなくむかし物かたり（73才）のやうにことさらめきてやおほされんまことにかくときこえはやとおもふにも

かはらしといひしるしは待みはやときはのりに秋やみゆると思とかへる山のとありし月かけはこの世のほかになるともわすれ給ましきをいかにしなしするそとあやしう心ほそくて火をつく／＼となかめてなみたくみ給へるまみのけしきのいとらうたけなるをめのとさすかにみおこせつゝ心もしらぬ人にうちまかせきこえてはるかなるほとにいてたちたまはんはくちおしき御さまかなと涙くまれけりあか月にくるまのをして門うちた／＼（73ウ）「なれはいてあはれ人のためにま心なるするかとのうへかなあまりとうさへ給へるよとてひきいるゝをきくにもむね打さはきてあすか河をこゝろもとなけにの給たりつればよさりなとほれいものし給はんにかやうにいひてかかへり給はんなど猶ものうきもうたてある心かなめのとの物いひもはつかしなからおほつかなくてものしなんことはくちをしく心より外の身のあやしきなればとまつ思ひつゝけられてうこかれぬをつまとをしあけてさらはとくわたらせ給へ人のい

そき侍るにひさしくならんもいとをしいひてあさやかな(74才)るきぬともてきてくしのはこやうの物なとくるまにとりいれなとしてたゝいそきにいそきてをそしくとおしいつるやうにすればわれにもあらてゐさりいつるもなにとおもひわくことはなけれと心さはきしてむねつとふたかりたる心ちすとりもいまそなくなる

あまのとをやすらひにこそいてしかとゆふつけとりよとはゝこたへよ猶たゝいまなとはきこえまほしきにとみにものりやらす涙せきやらぬけしきなるをましていかにとみちのほと有さま思ひやるにめのと又人ひとりそしりにのりぬるかとおきいつるよりやなくひな(74ウ)とをひいひしらすおそろしけなるすかたしたるものとも数しらすおほくて火はひるのやうにともしてあけはてぬさきにとくくといふけはひとあやしうものおそろしきにはいかなることそとたゝかきくらす心ちすれはきぬを引かつきてふしたるにかの行かたしらぬとありしをきゝはしめたりしより打はしめ月ころいひちきり給へりしけはひ思ひ出られてわか身はいかに成ぬるにかと思ふかいみしきによとゝいふ所にいきつきぬれはふねにのせんとてゝしりあひたるにされはこそときはにはあらさりけりと思ふに物もおほえ(75才)ねとめはみゆるにやきしにふねよせてのせうつさんとて年廿はかりなるおとこのそゝろかなるさまかたちなるいといみしう心行たるけしきにもてなして大二殿はいまはとりかひといふところまではおほしぬらん中なこんとのゝ御ものいみのかたよ(か)りつればとみにもえいてゝをくれ奉りぬるよ御きそくのよろしからさりつれはいとまもえ申いつましきなめりと思ひつるにかうみやうの御むまをこそたまはせられたなといひてをくりの人々なるへしおなしほとなる人々とむかひあてえくちのわたりのせうえうはこのたひはふようなめれ(75ウ)は大貳殿のいそき給めりなとほこりに打わらひたるけしきのつきくしさに物ならん行幸賀茂のまつりにけひあしへのたう

のしりにこそかやうのおそろしけなる物さゝけなとしてあるものこそかゝるかたちはしたれみるたにうとましくくるまにきてさらはとく御ふねにたてまつりねとてかきいたきてのせうつすほと心のちいかはかり有けんめのと心ゆきたるきそくして物いひゑわらひなとするもねたうかなしとはよのつねなりいかなるものゝいつれのせかひにゐて行にかあらんとすへていひやるかたなきにおきはしりて河にもお(76才)ち入なはやとおもへとたゝいまおとし入て見る人あるましかしらはたにさしいてすひきかつきて物したりおとこそふひしてえもいはぬことをいひなくさむれはいとゝなきまささりてあやにくなるけしきなればさの給ふともたけきことよもおほせしと思へはいとおこかましやなにかしの少将のかけめにてみち行人ことにくゝろをつくしむねをこかし給はんやはあやしくとも又なく思ひかしつききこえんをとるところにておほせ(か)しなまきんたちは中中心ちあしき物そ殿のおはしまさんかきりはをのれらをそのきんたちはえこそあなつら(76ウ)さらめさばかりの少将にならんとおもはゝなりぬへしよしみたまへらいねんは帰のほりて五位の蔵人になりてそのぬしといつれかまさりたるさなりいてゝみせ奉つらんくちおしうほいなしとおほすともいまはいふかひなればたゝおひらかにもてなしていとしなくしからぬやうにても御心にあかぬことなくやすらかにてすぐさせ給へきむたちならすとてをのれをわろき物に人思ひたらねはかやうに女にまたこそにくみならはされぬ御まへたちよりもまさりてやんことなき人たちわれもくといひ侍つれとうつまさにて見奉りそ(77才)めしより思ひしみにし心のなをりかたくかくめいほくなきことをみ侍こそ猶これ申なし給へなといひあたふかつき給へるきぬをせちに引やりて見るにほのかなりしよりもちかまさりしていとらうたけにをかしけなればうれしくていかてとく思ひなくさませてあかぬことなくかしつきてみんなと思ひけりおとつれくなりしなこりなくそのわたりの

ものともときあつまるをもてあつかひたる心ちいとうれしくおもふさまなるにこの女君の御有さまのいとあきたくあやにくなるをいかにみ給らんさはかり我もくゝとむこにほしかりし人（77ウ）をすてゝかゝる御けしきのみ給はさいはひとこそおほすへけれあらみさきといふものはなたぬ人はかうこそあなれよかるへきことはあしくそおほゆなるなど人々いひてなけくをきゝておとゝたにもさしいて給へやかくこそ心うき御心ならんすらむとこそおもはざりしかほいなきやうにはいかておほさゝらんざりとてあまりあやしやとてものしけなるけしきなりかはこなとやうの物あけさせて人々のえさせたりけるあふきたき物なとりいたしてはかくしからねとある人々にもものし給へかゝる人をはすへしともしらせざりしにいかてかしりけん忍ひて人いてくなり（78オ）とてそれかしかれかしなといひてとりちらすなかに女のさうそくの心ことなるかあるを中なこんどのゝたれとはしらねとゐてきたる人にならずきせよとて給はせたりつる御心さしのまゝにたてまつり給へ御涙にいたくしほれぬめりなといふをけになへてならぬ色あひにこそ侍けれなとめてゐたり又この御あふきはもたせ給へりつるをあたらしきよりはと申とりたりつるをはつかしき人にもこそあれいたうしほれたりとおしませ給つれとかたみにみよとの給はせつるはかなくうちもたせ給へるかやうの物さへそなへての人にはにさせ給はぬやなといふをきくにも（78ウ）これはさはうつまさにてもきゝし物にこそあなれこと人にてたにあらてあな心うの身の有さまやおもふにいとかなしくてなきめたるにこのあふきをさしよせてこれ御らんせよやいかにしてひともしもみはやと女のたかきもくたれるも心をつくしきはく御てよこれみ給てはまるかにくさもなくさみ給てんといふをまことにわかみしをなしてにやとゆかしきに人めもしらすおきあかりてみつへくおほゆれとかほなとのあきらかにみえぬへければ猶なきふしたるをわか君をこそかやうにいのちにかへて恋かなし

まめそのあをひれおとこによりていのちたえぬへく（79オ）見え給こそかへりては心つきなけれ何ことをさまては思ひ給そまろかかほはそれにやをとりにたりけるとみ給へくゝとあたへてきぬをせちにひきあけんとするに神仏かゝるめみせてうしなひ給へとなきこかるゝさまのあまりうたてけなればむつかりていてぬるまにこのあふきをとりてみればひと夜もち給へりしなりけりうつりかのなつかしさはうちかはし給へりしにほひにもかはらすさうにもまなにもかきませ給へるをなくなくみればわたる舟人かちをたえと返々かゝれたるそのおりはわれとしりてかゝれたるにはあらしをされとたゝいま見つけたるはことしもこそ（79ウ）あれいかてかなしとおほえさらんかほにあてゝなかるゝさまゑもみなおちぬへし

かちをたえいのちもたゆ《たえぬ》としらせはやなみたのふちにし
つむ舟人

そへてけるあふきのかせをしるへにてかへるなみにや身をたくへま
し

なとおもひつゝけるゝにも物のおほゆるにやとわれなから心うしあす
か川のわたりをなけき給へりしおりかゝらん物とはおもはざりしにけさ
も御ふみ有つらむかしにいかにいひてかへしつらむ打きゝ給ひていかに
ほしつらんと思ひやるはいかゝはよのつねの心ちせん（80オ）

うみまては思ひやいりしあすか川ひるまをまてとたのめし物を心え
ぬ夢とありしはいかなりけることにかきゝたにあはせてやみにしいふせ
さをいかにせんとなきこかれてもあまりそあるかくれいならぬ有さまを
いかてしらせたてまつらしと思ひけんさらは今すこしあはれとはおほし
なましとおもふにもうちかへしもしいのち思にかなはてなからへは行す
ゑにきゝあはせ給ふやうもあらはさてこそあむなれときかれ奉らんもい
ますこし心うかりなんかしなとてしらぬあたりの物にてたにあらてかく

したしくてきゝあはせ給ふへかりけるゆ(80ウ)「かりにしも有けんと
をき程までいきつきてこのありさまみあつかはれぬさきにたゝゝいかにし
てもしめるわさかなと思へはかくて四五日にも成ぬれと水などをたに
よせすめのはきつゝよろつにいへといとかく心うかりける心をしらて
とし比おやのおなしことに思ひたのみてすくしけるさへくやししく心うか
りければかなしくつらくてきゝもいれられすたゝ引かつきてなきふした
りおともしはしはいかて心ならぬことなればひんなしとは思はさらむ
さのみはあらしきりともとおもふ程にかくいとあさましくていのちもた
えぬへきさまなればかくまで思へきことかは(81才)「とあやしく心つ
きなくおほえてあやにく心もつきまさりてとかくひきうこかしうらむれ
は思ひわひてをしはかり給めるやうにいとかくおもふへき身のほと有さ
まならねはひんなしなどにはあらす心ちのれいならすのみありしかいとゝ
まさりて昨日けふはいとゝなからふへき心ちもせぬをいまはいかにも
御心にこそあらめいとかうおほゆるほとをすくし給へ人けちかきはいとゝ
くるしうのみおほゆるはいかになるへきにかとてなくけはひなとけにた
のみすくなけにきえいりぬへきけしきなればたゝならぬ人はつねに心ち
なんあしくするときくはさやうのにてかゝ(81ウ)「るにやいとかく物
なともくはてさやうの事なんいとあしかんなる物をなとさすかにいとお
しくていたうもあやにくたゝてひとひもなみにとささひにたるあいきや
うなくゆゝしくたひそうともにいのりせさせなとよろつにもてあつかひ
つゝ又はひよりてとさまかうさまにうらむるを聞たひことにいかにせま
しかくうきをしらぬいのちなかさにてはつるにいかになりなと思ふに
すへきかたなければこのうみにやおち入なましとおもひなりぬきやうに
は夜もすかられいよりもおほつかなくおもひあかし給て又の日はいつし
か御ふみつかはしたるに門もさして人の音(82才)「もせねはあやしう
て猶たゝけはいみしけなるけすいきてきたるとへはしらすたゝよへこの

とのにはやとり侍しなりつくしの小式と申人のたちぬる月この殿はかひ
給ひしなりいまあすそわたり給ふそれやをし所もしり給らんをのれは
たゝ人たち給なりこよひいけとありしかはまうてこしといへはかくすな
めりないまはさてそやまんとおとして(を)きてとなりの人々にとへ
はたしかなることいふもなければまいりてしかくくと申せはいとあさま
しくあへなしなともをろかなりいかにもめのとのしつることにこそあら
め身つからの心には何事のつらさに(82ウ)「かはたちまちにゆきかく
れんとも思はんいみしくともわか心とはさやうにはあらしと見えし心さ
まをたのみていまゝてかくてはをきたりつるそかしとありしほうしの
とりかくしつるならんかしいかはかりねたしと思ふらんとしらぬにはあ
らさりつれとかくもてさはかんもさすかにいかにそやおほえてかくしな
しつるもあまりなるわか心のたゆぐしさをかしあすはふちせにとあり
しもいかなるけしきを見てかいひたりけんと思ひつゝけられ給にいみし
うくちをし何事もたくひなく有かたうめてたかりしにはあらてたゝなつ
かし(83才)「うあはれと覚えつればたちまちにみしとまてはおもはさ
りつるにかく行ゑなくなしつるよとおほすもむねふたかり給てつくく
となかめくらし給まことしくやんことなきゝはにこそあらさらめさるか
たなるしたくさのよすかの露ともなくさめぬへかりつる物をさまことに
物をそろしけなりしものゝなれやらん有さまをいかはかり思ひなけくら
んとねたくゆゝしうもさまぐに覺しやるに人わろうこひしうも思ひ出
られ給てよるもまともまれたまはす

しきたへの枕そうきてなかれける君なきと(83ウ)「この秋のねさ
めは何事よりもかの夢のおほつかなさはいかにとたに聞あきらめてやみ
ぬるはいといふせくおほつかさもよのつねなりいつれにてもはかくし
き人にはあらしをまことにさることもあらはなれかほにもてなしてあら
んこそううかたしけなければましてとし月へてかゝみのかけもかはらぬ

さまにていひしらぬものゝなかにおひいてたらんにいてやかゝればこそよからぬふるまひはすましきものなれすこし人数なるものゝかう跡たなきやうやはある何かはあなかにおもひかすまふへき世にさることもあらしとしぬ（ゐ）てあ（84才）「さきかたに覚えなせとよろづよりも猶おほかなきかたのことはむねふたかりてあつまのかたへなときゝしはもしさもあらはふせやにおひいてんさまなど御心にかゝりて我御すくせのほとくちをしくおほさる

そのはらと人もこそきけはゝ木ゝのなとかふせやにおひはしめけんつねに心ちよからぬ御ことくさにならひたるなかにこの秋はむしの音しけきあさちかはらにことならすなきくらし給つゝもひるはをのつからまきれ給を心のつまとかやいひふるしたるたくれのそらきりわたりてありかたためたる雲のたゝすまひ（84ウ）「うら山しくなめやられ給にしの山もとはけにおもふことなき人たに物あはれなるへきにかりさへ雲るはるかに鳴わたりて涙の露もさかり過たるはきのうへにたまとをきわたりつゝ鳴よわりたるむしのこゑくさへつねよりもあはれけなるにさへちかきすいかひのつらなるくれ竹おきの上かせなにときゝわかれぬむしのこゑく木からしに吹まよはなれたるは涙もとゝめかたく身にしみて心ほそくきこゆればすたれをすこしまきあげ給へるに木々のこすゑも色つきわたりてさとふきいれられたり（85才）

せくそてにもりてなみたやそめつらん木すゑ色ますあきのたくれ
たくれの露吹むすふ木からしや身にしむあきのこひのつまなる

なとさまく恋わたり給て涙をしのこひ給てつきのをかしけさはたゝかはかりをさいはひにてこのよの思ひいてにしつへしとて（そ）みえける雨さへすこしふりていとゝきりふかく見えわたさるゝ空のけしきはまことに物みしりたらん人にみせまほしけなりまたこれりやうふうのゆふへてんの雨とくちすさひ給へるなとしつむ舟人なきこかるゝもことほり

なりかしかの舟に（85ウ）「は日かすのつもるまゝに心ちもまことにあるかなきかになり行をかくてしなはむなしきからをこれかれにみあつかはれんもねたくちをしきに猶いかてうみにおち入なんと思ひてさるへきひまを見るにさすかに人めのみしけて日ころに成行にこのたいふよろづにうらみつゝ衣のせきをうらみわふれとおなし事をのみなこやかにいへはさすかになさけたつ人にていとよはけなるさまを心くるしく思ひつゝちかくもえよらさりけりかゝる程に大の舟にやんことなき人のなへての女にはにぬかましたりけるを心かけてかたらひありきけりよひ過るまでみえぬをう（86才）「れしと思にかゝることをきゝてめのとはいとやすからすはらたゝしきにもきみのかくしつみふし給へればそかしれいのやうにておはせましかはかゝることなからましと思ふにもいとゝ心うくつらくさへおほえてをのか身をとさまかうさまにせためなし給よかゝる人の物いたくおもふはいみ侍なりいのちあらはわすれかたくおほさむ人にもあひみさせ給なんいとかく心おさなくいふかひなき心はいかなる人があるなといみしきことほりをいひきかすれとたゝこの大ゆふかみえぬおりくゝいてくるを我おもふことはかなふへきなめりと思ふよりほかのことなければいてあなあはれにまかせてもみてあ（86ウ）「あなかちに身をもてなしてうきめを見すればそかしかなる有さまにてなからへんとすらんなとさすかにあはれにかなしくおほえ給へはいとゝねをのみなきていらへをたにし給はねはうちむつかりてたちぬるまにかしらもたけて見たすに人々ねたるさまなればうれしとはよのつねならす思ひなからこよひやかきりならんと思にづかららん人たにおもひいたされぬへしまいてわれや忘るゝ人やとはぬと思ひしはおこなりけるわさかなと思ひつゝきたちぬれば涙の海に身はやかてうきいてゝうこかれすおきのかたのつまとをしあけてつくゝとみ出せば空はいさゝかなるうき雲（87才）」もなくて月のかけさやかにすみわたりたるに山ははるかにうみ

のおもてきしかた行ききとも見えすはるくと行ゑもはてもしらすよせ
かへるなみはかりとみえて舟のはるかにこきゆくかいと心ほそきこゑに
てむしあけのせとへこよひとうたふもいとあはれにきこゆ

なかれても逢瀬ありやと身をなけてむしあけのせとに待心みんとて
もかほに袖をゝしあててとみにもうこかれぬほとに人やみつけんとしつ
心なければわなゝくゝひとへにはかまはかりをきてかみかきこしなと
するにありし御あふきの枕にありければ手にさはりたるも心さは(87ウ)「
きせられてまつとりて見れば涙にくもりてはかくしくもみえすすみの
つやはかりそきらくとしてたゝいまかき給つるさまなりさしむかひ給
へりしおもかけさへふと思出らるゝにこの世にては又みたてまつるまし
きそかしたゝいまくなりぬともしり給はていつくにいかにしておはす
らんねやしたまひぬらんさりともねさめにはおほしいつらんかしたゝな
とひとつことよりほかに又なき心まとひなり

よせかへるおきのしらなみたよりあらはあふせをそことつけもしな
ましすゝりをせかひにとりいてゝこの御あふきに物かゝんとするにめも
(88才)「きりふたかりてとみにもかゝれす

はやきせのそのみくつと成にきとあふきのかせよ吹もつたへよと
もえかきはてす人のけはひのすれはとくおち入なんとてうみをのそくに
いみしうおそろし(88ウ)「